

ト號ス、文獻通考ニ云フ、宋朝樞密院、與中書對持文武二柄、號爲二府、院在中書之北ト是ナリ、

按スルニ樞密使ト云フ官ハ、本ト唐ノ代宋ノ時ヨリ始リテ、宦官ノ官ナリシカ、五代ノ時ニ宰相ノ任トナリ、宋ニ至テ中書省ト相並ヒテ、兩府ト稱ス、其後樞密使ハ武事ノミニ限ラス、百官ヲ任免シ、文史ヲ脩スル等、大小ノ事ニ預カル、中書省ハ專ラ事務ヲ執リ、樞密使ノ權甚々盛ニシテ三省中書、尚書、門下ノ上ニ出ツ、故ニ兩府ト稱スルナリ、

元ハ政務ヲ總フル者ヲ、中書省ト曰フ、兵柄ヲ秉ル者ヲ樞密院ト曰フ、黜陟ヲ司トル者ヲ御史臺ト曰フ、其下ニ寺監及内外ノ諸官、常職アリ、常員アリ、各官ノ長ハ必ス蒙古人ヲ用非、漢人ハ之ニ副タリ、按スルニ太祖朔土ニ起リテ、本ト官制ナシ、萬戶ヲ以テ軍旅ヲ統

秩祿並爵位

ハ、斷事官ヲ以テ政刑ヲ治メ、任用スル者ハ、親貴ノ重臣一人ニ過キス、世祖位ニ即クニ及ンテ大ニ官制ヲ新クニシ、劉秉忠、許衡等ニ命シテ、内外ノ官制ヲ定メシム、

宋ノ俸祿ノ制、宰相、樞密使ハ、俸錢月ニ三百貫、春冬ニハ綾二十四、絹三十四、綿百兩、參知政事、樞密副使ハ、月ニ二百貫、綾十四、絹三十四、綿五十兩、其下是ヲ以テ差ヲナス、節度使ハ、月ニ四百貫、觀察ハ、月ニ二百貫、綾絹ハ各之ヲ分チ給ス、又別ニ祿粟アリ、宰相、樞密使ハ、各、月ニ百石、節度使百五十石、觀察百石、以下是ヲ以テ差ヲナス、凡ソ一石ハ給スルコト六斗ニシテ、米、麥各半ハス、俸錢、俸祿ノ外ニ、職錢アリ、隨身アリ、茶酒ノ料、薪炭ノ料アリ、外官ハ別ニ公用錢アリ、金ノ時、正一品三師ニテ、錢三百貫、粟三百石、麩、米、麥各五十石、春衣羅五十四、秋衣綾五十四、春秋ニ絹各二百匹、綿千兩、以下、各差アリ、



租稅

元ノ左右丞相、太師、太傅、太保ハ各俸錢百四十貫、米十五石、以下次第ニ減省ス、

宋ノ爵位、唐制ニ因ル、正從九品ノ別アリ、其爵王ヨリ男ニ至ル、凡テ九等、世襲セス、勳ハ上柱國ヨリ武騎尉ニ至ルマテ、凡テ十二級アリ、元亦大同小異ナリ、

宋ノ稅法ハ、五代ノ後ヲ承ケ、唐ノ兩稅ノ法ヲ用ヰタリ、夏稅ハ六月朔日ニ起徵シ、秋稅ハ十月朔日ニ起徵ス、永ク定制トナル、而シテ其稅品ニ四類アリ、穀、帛、金鐵、物產是ナリ、穀ノ品七ツ、粟、麥、稻、菽ノ類ヲ云、帛ノ品十一、綾、羅、絹、緞、綿、布ノ類ヲ云、金鐵ノ品四ツ、金、銀、鐵及ヒ錢ヲ云、物產ノ品八、畜、茶、鹽、藥、竹、木、油、漆、蠟、雜物等ナリ、又更ニ商稅アリ、即チ往來ニ貨ヲ齎ス者ハ、千錢コトニ二十ヲ算ス、之ヲ過稅ト云ヒ、市ニ鬻ク者ハ、千錢コトニ三十ヲ算ス、之ヲ住稅ト云フ、神宗ノ朝、王

貨幣

安石新法ヲ行フニ當テ、此法亦一時大ニ壞ル元ノ稅法ハ、丁ト地トノ稅ハ、唐ノ租庸調ニ倣ヒ、夏秋ノ稅ハ、兩稅ノ法ニ倣フ、而シテ內郡ヨリ收ル者ハ、丁稅地稅ヲ以テシ、江南ヨリ收ル者ハ、夏稅秋稅ヲ以テス、

宋ノ初メ、錢ノ文ヲ宋元通寶ト云、太宗以來、改元コトニ必ス錢ヲ鑄ル、當時ノ年號ヲ以テ銘トス、通寶或ハ元寶ト云フ、淳化通寶ハ、眞草行三體トモニ、太宗ノ筆ナリ、仁宗ニ至テ、當十、當五、當三、折二及ヒ小錢ヲ鑄ル、凡テ五等、當十ハ小錢十文ニ當リ、折二ハ二文ニ當ル、遼、金、元、亦錢ヲ鑄ル、宋ニ同シ、宋ノ慶曆以來、蜀ニ始テ交子アリ、建炎以來、東南ニ會子アリ、交會行ハレテヨリ、楮始メテ錢トナル、交子ハ又寶鈔ト云、紙ヲ以テ、之ヲ作り、定メテ三年、若クハ七年コトニ之ヲ易ヘ、官錢ヲ以テ本トス、金人ハ期限ヲ立テス、文字暗黒ナル者ヲ易ルノ



兵制

ミ之ヲ交鈔ト云、亦錢ヲ以テ本トセス、元人ハ絲ヲ以テ本トス、之ヲ  
 絲鈔ト云、物品ノ價直並ニ絲例ニ從フ、  
 宋ノ兵制三等アリ、京師ヲ守リ、征伐ニ備フル者ヲ、禁軍ト云、諸州ノ  
 鎮兵、役使ニ分チ給スルモノヲ、廂軍ト云、戶籍ニ選ンテ、團結訓練シ、  
 所々ヲ防守スルモノハ、則郷兵ト云、又蕃兵アリ、塞下内屬ノ諸部落、  
 團結シテ藩屏ノ兵トスルナリ、太祖ノ時、天下ノ兵ヲ合セテ、二十萬  
 アリ、内十萬ハ、京師ニアリ、十萬ハ、諸道ニアリ、爾後漸ク兵ヲ増シ、英  
 宗ノ時ニハ、百十六萬二千ニシテ、禁軍馬步六十六萬三千アリ、神宗  
 ノ時、王安石冗兵ヲ省クノ論ヲ唱ヘ、更メテ保甲ノ法ヲ行フ、畿内ノ  
 民十人ヲ一保トシ、其内富者一人ヲ長トス、是ヲ保長ト云、五十家ヲ  
 一大保トシ、其長ヲ大保長ト云、十大保ヲ一都保トシ、其長ヲ都保正  
 ト云、常ニ武ヲ修メ、盜ニ備フ、是ヲ保甲ノ法ト云、此法畿内ヨリシテ、

遂ニ天下ニ及ホス、是ニ於テ、募兵ノ法廢シテ、農兵トナル、平時農ニ  
 就キ、事ニ臨ンテ兵トナルノ制ナリ、保甲ノ法、五日コトニ武ヲ講ス、  
 哲宗ノ時、司馬光其制ヲ改メ、每冬三月ヲ以テ武ヲ講ス、徽宗ノ時、諸  
 路ノ保甲六十一萬餘人アリ、南渡以後ニ至テハ、兵制大ニ衰フ、元ノ  
 初メ、兵ヲ典ルニ萬戶、千戶等ノ官アリ、世祖ニ及ンテ、左、右、中、前後ノ  
 五衛ヲ立ツ、以テ宿衛諸軍ヲ總フ、蒙古軍中、揆馬赤ト稱スル隊ハ、蒙  
 古ノ部族ナリ、凡ソ民十五以上七十以下、衆寡トナク、盡ク兵トス、孩  
 幼稍長スレハ、又之ヲ籍シテ、漸丁軍ト云、既ニ宋ヲ平ケ、民ヲ發シテ  
 卒トス、是ヲ漢軍ト云、或ハ貧富ヲ以テ甲乙ヲ分チ、戶コトニ一人ヲ  
 出スヲ獨戶軍ト云、二三戶ニシテ一人ヲ出スヲ正軍戶ト云、匠ヲ取  
 テ軍ヲ爲スヲ匠軍ト云、ヒ、將校ノ子弟ヲ取テ軍ニ充ツルヲ質子軍  
 ト云、又拔名アル者ハ、砲軍、弩軍、水手軍ト云、而シテ兵籍ハ、樞密ノ長



學制

官一二人之ヲ知ルノミ、故ニ國ヲ有ツ百年、内外兵數ノ多寡、人之ヲ知ルモノナシ、

宋ノ初メ、京官七品以上ノ子弟ヲ以テ、國子生トシ、八品以下及ヒ庶人ノ子弟中、俊異ナル者ヲ以テ、大學生トス、試問ノ法、進士ノ法ノ如シ、仁宗ノ時ニ及ンテ、四門學ヲ立テ、八品以下、庶人ノ子弟ヲ以テ、學生ニ充ツ、幾時モナク、廢セラル、仁宗ノ時、安定ノ人、胡瑗、隋唐以來、文辭ヲ尙ヒ、祿利ニ趨ルノ弊ヲ思ヒテ、經義齊治事齊ヲ立テ、諸生ヲ教フ、其法甚タ備ハル、朝廷、大學ヲ建ツルニ、胡瑗ノ法ヲ取リ、大學程トス、瑗ヲ召シ、國子師トス、瑗既ニ至リ、其徒ヲ擇ミ、其教ヲ掌ル、四方ノ學士雲ノ如クニ集マル、費舍容ル、能ハス、宋ハ初メ、國學アリテ、州縣ノ學未タ立タス、仁宗ニ至リ、諸路、州、郡ニ詔シテ、學ヲ立テシム、神宗尤モ意ヲ學事ニ留ム、元豐中、王安石ノ議ニ從ヒ、學令ヲ頒チ、大學

八十齋ヲ置ク、齋各、三十人ヲ容ル、學生ヲ分テ三等トシ、初テ入ルヲ外舍生トシ、定員二千人、外舍ヨリ、内舍ニ昇ル、其員二百人、内舍ヨリ、上舍ニ昇ル、其員百人ヲ以テ限トス、各一經ヲ執リ、講官ニ從テ、學ヲ受ク、毎月一タヒ私試シ、每歲一タヒ公試ス、次第ニ試テ、經テ、中書省ニ上ル、之ヲ三舍昇補ノ法ト云フ、科舉ノ法ヲ罷ム、通者ニ、安石此法ヲ設ケテ、其黨ヲ引用セント欲スルノミト、是ナリ、南渡ノ後、高宗元豐ノ制ニ倣フテ、大學ヲ建ツ、又臨安ニ、宗學ヲ建テ、レ、學生百人ヲ額トス、是レ天子ノ親族宗室ヲ教フル所ナリ、

元ノ太宗ノ六年ニ、國子總教、並ニ提學官ヲ設ク、蠻夷ノ國ヲ以テ、兵革未タ定マラサル時ニ、已ニ文教ヲ興サレタリ、世祖ノ時ニ、國子監ヲ設ケ、生員百二十人トシ、蒙古人、漢人相半ハス、尋テ、諸路縣ニ、令シテ、小學ヲ設立セシメ、老成ノ士ヲ選ンテ、之カ教授ヲ主トシシム、武



宗更ニ國子生ヲ増シテ三百人トス、仁宗ニ至リ、昇齋積分ノ法ヲ立ツ、毎季其學行ヲ考ヘ、次第ヲ以テ昇ル、既ニ上齋ニ昇リ、二歳ヲ除エレハ、始テ私試ニ與カル、辞理俱ニ優ナル者ヲ一分トス、辞平ニシテ理優ナル者ヲ半分トス、歳終積テ八分ニ至ル者ヲ高等トス、禮部集賢ノ二官舎ニテ、毎歳六人ヲ選ンテ以テ貢ス、其法前代ニ比スルニ頗ル詳ナリ、

刑辟

宋ノ刑名、前代ニ因テ損益アリ、又一種凌遲ノ刑ト名ケ、其支體ヲ斬テ、次ニ其吭ヲ斷ツノ刑アレヒ、刑名ニ入ラズ、一時極惡ヲ刑スルモノナリ、又律令ヲ除クノ外ニ、更ニ勅令格式ト曰モノアリ、凡ソ律ノ載セサル所、一ツニ斷スルニ勅ヲ以テシ、人ヲ刑スルアリ、此時又殊ニ失入ノ罪ヲ重シ、失出三人ヲ以テ失入一人ニ比ス、又流コトニ各、杖ヲ以テシテ、又役ヲ配ス、徒流、杖ノ三罪ヲ兼用スルニ當ル、又既

戸口

ニ其背ニ杖シ、又其人ヲ配シ、且其面ヲ刺ス、是又一人ニシテ三刑ヲ兼受スルナリ、元ノ刑名ハ、大抵唐宋ノ制ニ因ル、五刑ノ目七ヨリ五十七ニ至ルヲ、答刑ト云ヒ、六十七ヨリ一百七ニ至ルヲ、杖刑ト云フ、流ハ則南人ハ北地ニ遷シ、北人ハ南地ニ遷ス、死刑ハ斬アリテ、絞ナシ、惡ノ極マル者、又凌遲死ニ處スルノ法アリ、凌遲ノ刑ヲ刑書ニ著スハ元ヲ始トス、

戸、九十六萬餘、

太宗天下ヲ一統シ、至道元年、版籍ヲ修ム、

戸、四百十三萬餘、



其後太平相續、天下ノ戸口世々ニ増加シテ、徽宗ノ崇寧元年ニハ、

戸、二千〇一萬九千五十

口、四千三百八十二萬七百六十九、

高宗ノ紹興三年、南渡ノ後ヲ承ケ、

戸、一千一百三十七萬五千七百三十三、

口、一千九百二十二萬餘、

元ノ世宗混一ノ初、

戸、一千三百一十九萬六千二百六、

口、五千八百八十三萬四千七百二十一、

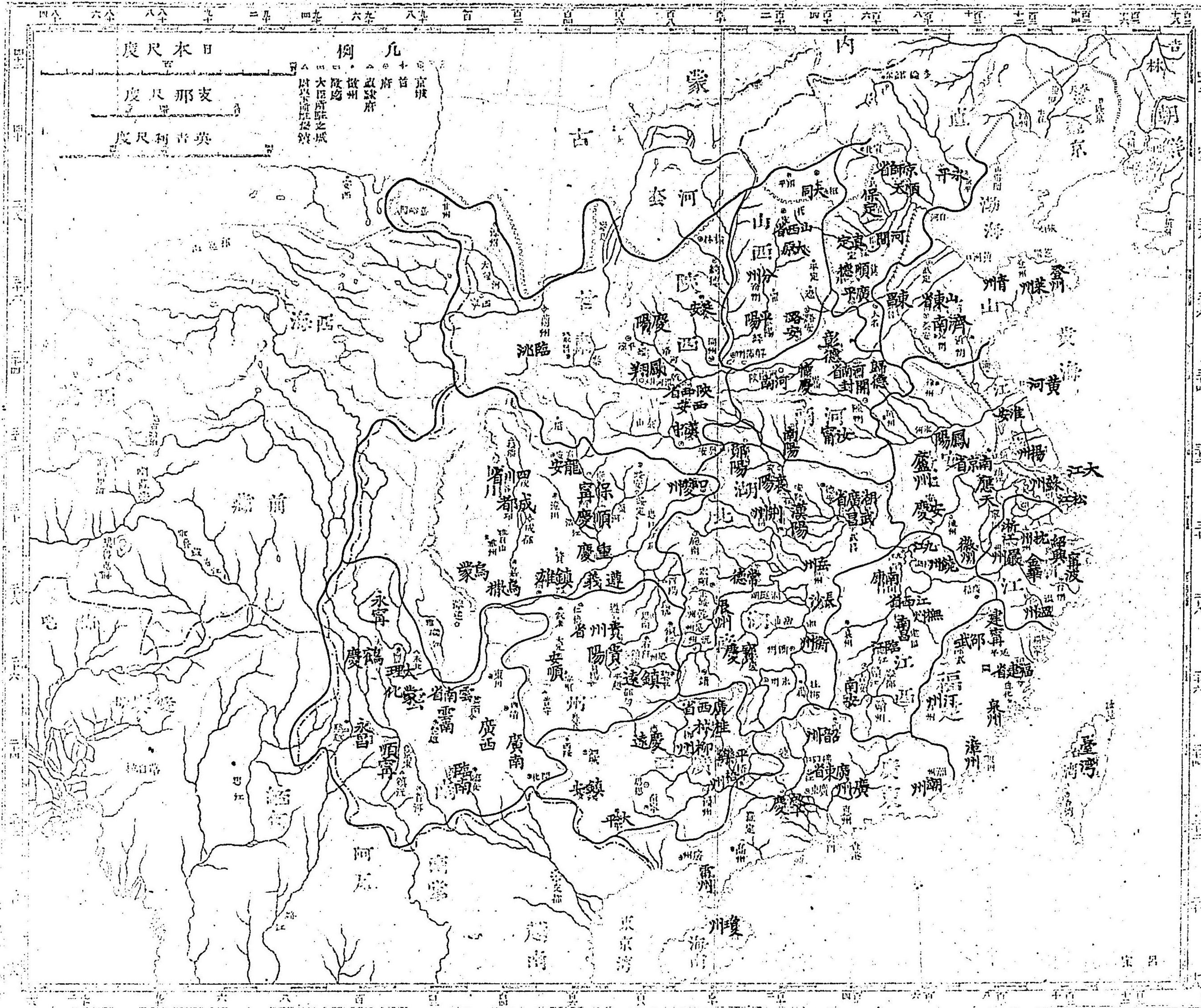
元ノ末年ニ至リテ、人口五千九百八十四萬餘アリ、是レ元ノ極盛ノ

時ノ數ナリトス、

卷之五終



明ノ圖





# 明ノ圖



## 支那文明史略卷之六

### 第三十一章

#### 明

明ノ太祖

太祖、姓ハ朱、名ハ元璋、濠州ノ人ナリ、少時常ニ病ニ苦シム、父僧ト爲  
 カント欲ス、後、父母及兄、疫ノ爲ニ死ス、家貧ニシテ歿スル能ハス、帝  
 仲ト屍ヲ昇シテ、山麓ニ至ル、纒絶ツ、仲還テ纒ヲ取り、帝ヲ留メテ、之  
 ナ守ラシム、忽チ雷雨大ニ起ル、帝村寺ノ中ニ避ク、曉ニ至テ往テ視  
 ル、土墳起シテ、高壘ヲ成ス、因テ歸ル、尋テ仲又死ス、帝時ニ年十七、遂  
 ニ皇覺寺ニ入テ僧トナル、後所在兵起リ、定遠ノ人、郭子興、濠州ニ據  
 ル、帝子興ニ属シテ親兵トナリ、攻伐アレハ輒チ往ク、往ケハ必ス勝  
 ツ、子興、馬氏ノ女ヲ養テ、己カ女トナシ、帝ニ妻ハス、即チ高后ナリ、帝

神武紀元二千〇二十八年ヨリ  
 同 二千三百〇四年マテ



大志アリ、郷里ニ歸リ、兵ヲ募ル、徐達、湯和、馮國用、常遇春、劉基、宋濂、等  
來リ屬ス、子興死スルニ及テ、其兵ヲ統ヘ、諸將ヲ率ヰテ、連リニ諸州  
ヲ陷ル、其鎮江ニ克ツヤ、士卒ヲ戒メテ曰ク、吾レ兵ヲ起セシヨリ、未  
タ嘗テ妄殺セス、今爾等亦當サニ吾カ心ヲ體スヘシ、城下ルノ日、焚  
掠殺戮スル勿レ、令ヲ犯カス者アラハ、處スルニ軍法ヲ以テセント、  
號令甚タ嚴肅ナリ、故ニ天下ノ豪傑多ク心ヲ歸シ、遂ニ上都ヲ陷レ、  
洪武元年、群臣ノ勸進ニ由テ、帝位ニ即ク、國ヲ明ト號ス、

馬氏皇后トナル

妃、馬氏ヲ立テ皇后トス、帝初メ江ヲ渡ル時、后、帝ニ謂テ曰ク、今豪傑  
並ヒ争フ、未タ天命ノ歸スル所ヲ知ラスト雖モ、妾ヲ以テ之ヲ觀レ  
ハ、惟、人ヲ殺サ、ルヲ以テ本トス、人心ノ歸スル所ハ、即チ天命ノア  
ル所ナリ、帝深ク之ヲ然リトス、是ニ至テ冊立シテ皇后トス、帝因テ  
侍臣ニ謂テ曰ク、昔、光武馮異ヲ勞シテ曰ク、倉卒燕蓼亭ノ豆粥、滹沱

河ノ麥飯、厚意久シク報セスト、朕念フニ、皇后布衣ヨリ起リ、常ニ倉  
卒ノ際自ラ飢餓ヲ忍ヒ、糗餌ヲ懷ニシテ、朕ニ食ハシム、之ヲ豆粥麥  
飯ニ比スルニ、其困尤モ甚タシ、昔唐ノ太宗ノ皇后、太宗ノ兄、建成ト  
際アルニ當テ、内能ク孝ヲ盡シ、謹テ諸妃ニ承ケ、嫌疑ヲ消釋セリ、朕  
素ヨリ郭氏ノ疑フ所トナル、然レモ后、郭氏ヲ慰メ、寬解シ、朕ヲシテ  
卒ニ危難ヲ免カレシメタリ、是レ太宗ノ后ニ過キタリ、朕或ハ服御  
ニ因テ、小過ヲ詰怒ス、輒チ朕ニ勸メテ曰ク、王昔日ノ貧賤ヲ忘ル、  
カト、朕爲ニ惕然タリ、家ノ良妻ハ猶ホ國ノ良相ノコトシ、豈之ヲ忘  
ル、ニ忍ンヤ、朝ヲ罷ムルニ及ンテ、以テ后ニ語ル、后曰ク、妾聞ク夫  
婦相保ツハ易ク、君臣相保ツハ難シト、妾固ヨリ、太宗ノ皇后ノ孝儉  
ナルニ如カス、但願クハ陛下堯舜ヲ以テ法ト爲ソ耳、  
太祖ノ行爲  
明ノ太祖ハ布衣ヨリ其身ヲ起シ、帝業ヲナセリ、其事蹟大ニ漢ノ高



祖ニ似タルアリ、初メ兵ヲ起ス時、天下ヲ平クルノ策ヲ、李善長ニ問  
 フ、善長曰ク、漢ノ高祖布衣ヨリ起リ、豁達大度、人ヲ知テ善ク任ス、五  
 年遂ニ帝業ヲナス、公ハ濠ニ産ル、沛ヲ去ル、遠カラス、漢ノ高祖ノ爲  
 ス所ニ法トシテ、天下定ムルニ足ラサルナリト、故ニ明祖ハ常ニ漢  
 祖ヲ其心中ニ置、一ニ之ニ習ハノコトヲ勉メタリ、夫ノ鼎ヲ金陵ニ  
 定メ、都城ヲ建ツルヤ、宮闕壯麗ヲ極ム、即チ蕭何ノ未央宮ヲ造ルノ  
 例ナリ、又江南ノ富民十四萬戸ヲ中都ニ徙ス、漢高齊楚ノ大族ヲ徙  
 シ、以テ關中ヲ富實ニシタルノ例ナリ、又子弟ヲ各省ニ分封シ、以テ  
 王家ノ藩屏ヲラシメタリ、又大獄ヲ起シテ、功臣ヲ誅戮セリ、皆漢高  
 ニ同シ、而シテ其刻薄ナルコト之ニ過キタルモノアリ、諸子ヲ封シ  
 テ王トスト、雖モ兵食ノ權ヲ以テ之ニ委テス、漢高ノ功臣ヲ誅スル、  
 固ヨリ殘忍ナリト雖モ、亦其叛ニ因テ之ヲ誅シ、或ハ謀反ノ端アル

明初ノ吏治

ナ見テ之ヲ征討セリ、明祖ハ然ラス、天下既ニ定マルニ及ソテ、盡ク  
 天下ヲ平定スルニ力ヲ盡セシ功臣ヲ擧ケテ、之ヲ殺ス、其殘忍實ニ  
 甚タシト謂フヘシ、  
 元ノ末ニ當テ、吏治弛ミ、人民ノ凋衰セルヲ見テ、官吏ニシテ民害ヲ  
 爲ス者アレハ、極刑ヲ以テ之ヲ處ス、然レモ毎ニ賢良ヲ旌擧シ、以テ  
 専ラ法ニ任セサルヲ示セリ、又或ハ士民ノ請ニ因テ、良吏ヲ留メテ  
 秩ヲ進ム、又吏ノ事ニ坐シテ捕ヘラル、モ部民ノ請ニ因テ、其官ヲ  
 復スルカ如キコトアリ、嘗テ地方官ノ來朝シタル時、帝之ニ諭シテ  
 曰ク、天下始テ定マル、百姓財力俱ニ困シム、故當今ノ方、恰モ初メテ  
 飛フノ鳥ハ其羽ヲ抜ク可ラス、新タニ植ウルノ木ハ其根ヲ搖カス  
 可ラス、之ヲ安養生息スルニアルカ如シ、爾等深ク之ヲ念フヘシト、  
 又嘗テ戶部ニ諭シテ曰ク、國家賦稅已ニ定マル、用度ヲ撙節スレハ、



自ラ餘饒アリ、民ヲシテ力ヲ農桑ニ盡サシムレハ、自ラ家給シ、人足ル、何ソ聚斂ヲ事トセント、太祖ノ後、諸帝亦意ヲ吏治ニ加ヘ、往々特ニ敕シテ之ヲ獎勵セリ、又官吏ハ重ク之ヲ罰シタリ、洪武十八年、詔シテ天下ノ官吏、民害ヲ爲ス者ヲ逮捕シ、京師ニ赴キ、城ヲ築カシム、又官吏ノ罪アル者、笞以上、悉ク鳳陽ノ屯田ニ謫ス、萬餘人ノ多キニ至ル、凡ソ守令ノ貪酷ナル者アレハ、人民ヲシテ京師ニ赴キ、陳訴スルヲ許ルセリ、贓六十兩以上ニ至ル者ハ、梟首シテ衆ニ示ス、其吏治ニ嚴ナル斯ノ如シ、

胡藍ノ反

帝胡惟庸ヲ以テ右丞相トス、帝嘗テ劉基ト相トスヘキ者ヲ論シ、胡惟庸ニ及フ、基曰ク、此レ小憤ノミ、將ニ轅ヲ償シテ犁ヲ破ラントスト、後遂ニ相トス、基大ニ憾テ曰ク、吾カ言ヲシテ、驗アラサラシメハ、蒼生ノ福ナリト、洪武十三年、惟庸逆ヲ謀リ、誅ニ伏ス、初メ惟庸帝ヲ

誑テ曰ク、居ル所ノ第ノ井中ニ醴泉湧出スト、帝ヲ邀ヘテ往キ觀セシメ、因テ弑セントス、駕西華門ヲ出ツ、内使雲奇、其謀ヲ知り、走テ蹕道ヲ衝キ、馬ヲ勒シテ狀ヲ言フ、舌缺シテ意ヲ達スル能ハス、帝、其不敬ヲ怒ル、左右亂打シテ奇ノ臂幾ト折ル、尙ホ惟庸カ第ヲ指シ、爲ニ痛縮セス、帝悟リ、城ニ登テ眺察スレハ、惟庸カ第内ニ兵甲屏帷ノ間ニ伏スルヲ見ル、即チ兵ヲ發シテ掩捕シ、拷掠シテ狀ヲ得タリ、因テ惟庸ヲ市ニ磔シ、悉ク其黨ヲ誅ス、連坐スル者三萬餘人アリ、後十餘年ヲ經テ、涼國公藍玉逆ヲ謀テ誅ニ伏ス、藍玉ハ常遇春ノ妻ノ弟ナルヲ以テ、征伐ニ從ヒ、功ヲ累テ大將軍ニ至ル、素ヨリ不學ナリ、性復タ狼狽、功ヲ恃テ暴橫、初メ胡惟庸ノ叛ニ玉謀ニ與カルト稱スル者アリ、帝其功ノ大ナルヲ以テ、之ヲ宥ルス、是ニ至テ遂ニ反ス、密カニ部曲ヲ召シテ謀議シ、士卒及家奴ヲ集メ、甲ヲ伏セテ將ニ變ヲ爲シ



燕王兵ヲ舉ク

トス、約束已ニ定マル、人之ヲ告クルアリ、捕訊シテ誅ニ伏ス、列侯已下、連坐シテ論死スル者、萬五千餘人アリ、太祖崩シテ、太孫建文帝立チ、幾何モナク、燕王ノ反アリ、燕ハ元朝ノ舊都ノアル所ニシテ、其人民ノ富強ナル、實ニ京師ニ敵スルニ足ルモノアリ、且燕王ノ武勇ヲ以テ此ニ據リ、朝廷ノ命モ懼ル、ニ足ラストシ、敢テ詔ヲ奉セス、建文帝即位ノ前既ニ之ヲ削ラント欲シ、策ヲ黃子澄及齊泰ニ問フ、子澄等對フルニ、漢ノ七國ヲ削ルノ事ヲ以テス、因テ即位ノ後、子澄等ニ命シテ、周、齊、燕等ノ諸王ヲ削ラントス、是ニ於テ、燕王兵ヲ舉ケ、齊、泰、黃子澄ヲ誅シ、君側ヲ清メ、周公ノ成王ヲ輔クル故事ヲ以テ名トシ、兵ヲ靖難ト稱ス、詔シテ、燕王ノ屬籍ヲ削リ、大兵ヲ發シテ之ヲ討タシム、大戰數回、互ニ勝敗アリシカ、燕軍遂ニ京師ニ逼ル、方孝孺曰ク、事急ナリ、地ヲ割テ和ヲ求メ、以テ四方

方孝孺等節ニ死ス

勳王ノ師ヲ俟ツニ若クハナシト、乃チ使テ遣ハシテ、燕王ニ説ク、王從ハス、帝祝髮シ、服ヲ變シテ出奔ス、後三十九年、英宗ノ時、京師ニ至リ、宮ニ入り、壽ヲ以テ終フ、燕王位ニ即キ、方孝孺ヲ召ス、屈セス、之ヲ獄ニ繋ク、帝即位ノ詔ヲ草セシメント欲ス、乃チ召シテ獄ヨリ出ス、孝孺斬衰シテ入テ見エ、悲慟スルコト甚ダシ、帝曰ク、我レ周公ノ成王ヲ輔クルニ法トルノミ、孝孺曰ク、成王安ニカアルヤ、帝曰ク、是レ自ラ火ニ焚ク、孝孺曰ク、何ソ成王ノ弟ヲ立テサル、帝榻ヲ降り、勞シテ曰ク、此レ朕カ家事ノミ、先生過キテ勞苦スルコト毋レト、左右筆札ヲ授ク、帝曰ク、天下ニ詔スル先生ニ非レハ不可ナリ、孝孺燕賊國ヲ篡フノ數字ヲ大書シ、筆ヲ地ニ擲チ、且哭シ、且罵リ曰ク、死セハ即チ死センノミ、詔ハ草ス可ラス、帝怒リ、



刀ヲ以テ其口ヲ抉シテ、兩耳ニ至ラシム、又之ヲ獄ニ錮シテ、大ニ其  
朋友門生ヲ収テ之ヲ殺ス、九族以下、坐シ死スル者、八百餘人、一人ヲ  
誅スル毎ニ、必ス孝孺ヲシテ之ヲ視セシム、而シテ後孝孺ヲ出シテ  
之ヲ磔ス、

故ノ兵部尙書鐵鉉、亦殺サル、鉉執ヘラレテ京師ニ至リ、陸見ス、廷中  
ニ背立シ、正言シテ屈セス、一顧セシムルモ得ヘカラス、其耳鼻ヲ割  
ク、竟ニ肯テ顧ミス、其肉ヲ蒸テ、鉉ノ口ニ納レテ、之ヲ啖ハシム、問テ  
曰ク、甘ヤ否ヤ、鉉聲ヲ厲シテ曰ク、忠臣孝子ノ肉、何ソ甘カラサルコ  
トアラソ、遂ニ之ヲ寸斷ス、死ニ至ルマテ、罵テ口ヲ絶グス、

齊秦、黃子澄、景清等抗辨シテ屈セス、亦殺サル、初メ景清建文帝ノ出  
亡ヲ知ルヤ、猶ホ興復ヲ思ヒ自ラ伴リテ歸附ス、常ニ利劍ヲ衣襟中  
ニ伏ス、一日帝出テ、門ニ御ス、清、奮躍シテ進ミ、將サニ駕ヲ犯カサ

高煦ノ反

ントス、執ヘラル、清、植立シテ嫚罵ス、其齒ヲ抉ス、且抉リ且罵ル、血ヲ  
含テ直ニ御袍ニ嚙ク、乃チ命シテ其皮ヲ剝キ、之ヲ草積シ、長安門ニ  
械繫ス、帝ノ駕門ヲ過ク、械スル所ノ皮、趨キ前ム數步、駕ヲ犯スノ狀  
ヲナス、帝命シテ之ヲ燒ク、已ニシテ帝寢ヌ、夢ニ仗劍ヲ以テ追テ御  
座ヲ繞ル、覺テ曰ク、清、猶ホ厲ヲ爲スカト、命シテ其族ヲ亦シ、其郷ヲ  
籍ス、村里爲ニ墟ス、

初メ高煦、成祖ノ二子ナルヲ以テ、漢王ニ封セラレ、雲南ニ國ス、高煦  
曰ク、我レ何ノ罪アリテ、萬里ノ外ニ退ケラル、後青州ニ改メラル、  
ニ及ンテ、又曰ク、我ヲ瘠土ニ置クト、留テ京師ニ居リ、兵器ヲ造リ、陰  
カニ死士ヲ養ヒ、亡命ヲ招キ、僭シテ天子ノ車服ヲ用ル、帝大ニ怒リ、  
之ヲ執ヘテ誅セントス、太子高熾力メテ救フ、乃チ封ヲ樂安ニ移シ、  
即日ニ行カシム、仁宗立テ在位僅カニ一年、太子宣宗立ツニ及ンテ、



高煦遂ニ反シ、奏シテ姦臣ヲ誅セシムコトヲ索ム、帝諸大臣ト議シ、親征シ、蓐食兼行シテ蹕ヲ樂安城北ニ駐メ、誓ヲ以テ城中ニ諭ス、城中ノ人、高煦ヲ執ヘテ、獻セントスルモノ多シ、高煦狼狽シテ降ヲ請フ、帝之ヲ許シ、高煦父子及倡謀ノ者、數人ヲ械シテ京師ニ送ル、趙王高燧亦叛チ企テタリシカ、高煦ノ執ヘテレタルヲ以テ、自ラ其護衛ヲ削テ、以テ謝ス、帝罪ヲ問ハス、後高煦京師ニアツテ殺サル、

也先入寇ス

英宗ノ時、瓦剌ノ也先入寇ス、至ル所陷沒セサルナシ、王振、帝ニ勸メテ親征セシム、群臣留マラシメテ請フ、王振終ニ聞カス、車駕大同ニ至ル、北虜伴リ和ヲ請ヒ、大ニ帝ノ軍ヲ敗ル、時ニ護衛將軍樊忠、帝ノ傍ニアリテ、王振ヲ殺シテ曰ク、天下ノ爲ニ此賊ヲ誅スト、後チ帝虜ノ爲ニ擒トナル、帝ノ弟郕王位ニ即ク、之ヲ景宗トス、也先、英宗ヲ擁シテ、大同城ニ至ル、金幣ヲ求メテ、駕ヲ還ヘサシメ、コトヲ約ス、都督

〇

郭登納レズシテ曰ク、虜我ヲ給クナリト、袁彬、頭ヲ以テ門ニ觸レ大呼シテ諫ム、是ニ於テ、已チ得ス、城中公私ノ金銀、萬餘兩ヲ括シテ、駕ヲ贖フ、虜、金ヲ獲テ、笑テ駕ヲ擁シテ去リ、直ニ京畿ニ逼ル、京師洶洶、都ヲ南ニ遷サントスルノ議アリシカ、是ヨリ先キ成祖都ヲ燕京ニ遷ス、宦官金英等ノ諫ニヨリ、固守ノ議ニ決ス、虜京師ヲ圍ム、于謙、士卒ニ率先シテ死チ示シ、泣テ忠義ヲ以テ三軍ニ諭ス、人人感奮、勇氣百倍ス、虜少シク沮ム、也先使ヲ遣ハシ、英宗ヲ還サシメ、コトヲ議ス、是ニ於テ御史楊善チシテ往テ迎ヘシム、善、也先ノ營ニ至ル、虜曰ク、汝何ノ禮物アリテ來リ迎フルト、善曰ク、天子ヲ送リ還ヘシ、名ヲ萬世ニ垂ル、チ圖ル、豈財物ヲ利センヤ、也先其言ヲ然リトシ、宴ヲ張テ饒シ、之ヲ送ル、

宦官權ヲ執ル

世祖京師ニ逼ルニ當テ、宦官等、建文帝ノ嚴酷ニ堪ヘズシテ、遁レテ燕軍ニ入り、京城ノ空虛ナルヲ告ク、世祖因テ京師ヲ陷レ、宦官ヲ以



倭寇

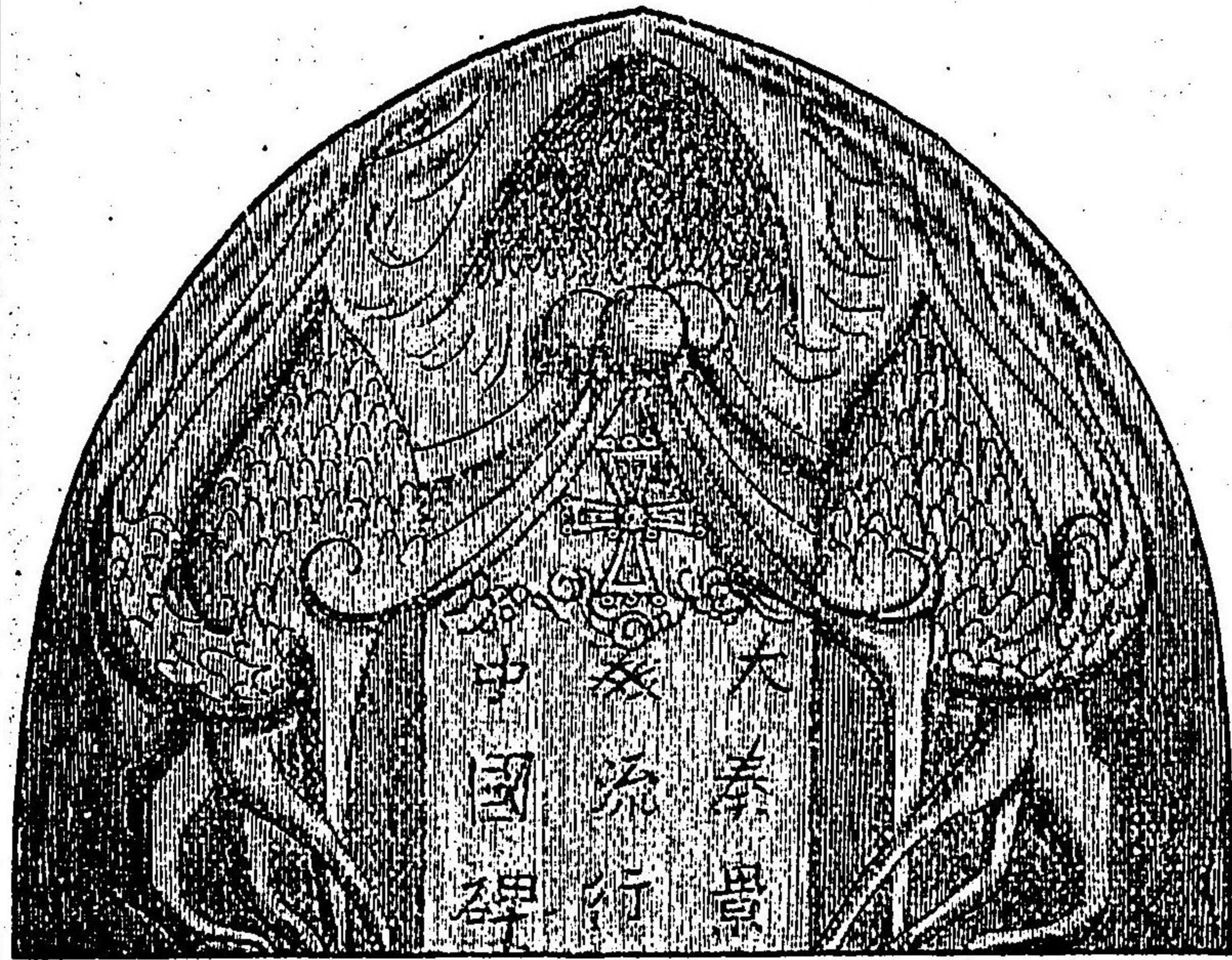
テ己レニ忠ナリトシ、稍之ヲ信用ス、故ニ世祖ノ末年ニ、宦者等相謀  
 リテ、帝ヲ弑シ、太子ヲ廢セントスルニ至ル、宣宗ニ至リ、内書堂ヲ設  
 ケ、小内官ヲシテ文字ヲ學ハシメシヨリ、王振ノ如キ者出テ、政權  
 ナ執ルニ至レリ、王振ハ多ク宦官ヲシテ、政務ニ預カラシメタリ、是  
 ヨリ内官ノ勢、朝廷ニ盛ニシテ、憲宗ノ時ニ汪直アリ、武宗ノ時ニ劉  
 瑾アリテ、皆政ヲ專ラニス、然レモ一ハ斥ケラレ、一ハ誅セラレタリ、  
 熹宗ノ世ニ魏忠賢用ヰラレ、肆行忌ムナク、車服天子ニ擬ス、内外文  
 武ノ諸臣、及宮嬪、内侍、忠賢ト協ハサル者ハ、皆謀テ之ヲ殺ス、毅宗立  
 ニ及ントテ始テ忠賢及其黨ヲ誅戮ス、  
 嘉靖中、世宗ノ年號、我日本後、  
 奈其天皇ノ天文年間、倭人入寇ス、蘇浙等ノ地千餘里、其害ヲ蒙  
 ムラサルナシ、初メ日本ノ商賈、閩浙ノ地ニアリテ私カニ互市ス、朱  
 統浙撫トナリ、其弊害アルヲ知リテ、之ヲ禁絶セシカハ、日本ノ商賈

天主教

大ニ怒リ、相結ンテ入寇ス、後又屢倭寇ノ爲ニ侵掠セラル、倭ノ中國  
 ニ寇スルヤ、奸民賄ヲ得テ、之カ爲ニ鄉導ス、故ヲ以テ、倭人據ル所ノ  
 營砦皆要害ノ地ヲ得、且盡ク明兵ノ虛實ヲ知ル、是レ其ノ劫掠ヲ縱  
 ニシタル所以ナリ、  
 神宗ノ時、意大理亞國ノ人、利瑪竇<sup>Matteo Ricci</sup>京師ニ至リ、方物ヲ獻シ、  
 並ニ天主及天主ノ母ノ圖ヲ貢ス、帝其遠來ヲ嘉シテ館ヲ假シ、餐ヲ  
 授ク、公卿以下、其人ヲ重シ、皆交接ス、利瑪竇之ニ安ンシ、遂ニ留居シ  
 テ去ラス、萬曆三十八年ニ卒ス、是ヨリ先キ、利瑪竇、萬曆九年ニ廣州  
 ノ香山澳ニ來リ、其教漸ク行ハル、後二十一年、始テ京師ニ入り、官民  
 多ク信スル者アリ、信徒ノ内、徐氏、受洗シテ「保羅」ト云フ者アリ、利氏ヲ補ケテ  
 布教ニ盡力シ、又「ユークリッド」ヲ支那語ニ譯スル爲ニ力  
 ナ用ヰタ、利瑪竇ノ死後、獨逸ノ「ゼシユイト」派ノ「シヤール」(Schall)ト云  
 フ人、徐氏ノ周旋ニ由テ、萬曆帝ニ見ヘ、布教ニ盡力セリ、支那ニ耶穌教



西安ニルア耶蘇教徒石碑ノ圖



甚タ古ク西曆五百五十一年、蠶種ヲ「コンスタントン」ニ留マリシヲ以テ、當時既ニ布教シ  
 ストリアン派ノ傳教師ニシテ、久シク支那内地ニ留マリシヲ以テ、當時既ニ布教シ  
 タラント信セラル、然レモ後流行セザリシモノナラン、西曆千六百二十五年、陝西ノ  
 西安府舊ノ長安ニテ發見セラレタル古碑ハ、昔時支那ニテ耶蘇教ノ流行シタルヲ  
 証スルニ足ル者ナリ、今碑ノ一部ヲ圖シテ示ス、此碑ハ大理石ニテ造リ、碑面ニ西教  
 ノ大意ヲ書シ、西曆紀元六百三十五年以後碑ヲ建ツル時唐ノ德宗建中二年一月七  
 日主日ニ至ルノ西教傳道ノ概略ヲ書ス、其文甚秀麗巧妙ニシテ、支那ノ學士ト雖モ  
 容易ニ讀ムヲ得スト、其英語ニ譯シタル者ハ、ウイリヤムス氏ノ中國ト稱スル書第  
 二卷ニアリ、  
 七頁ニアリ、

明ノ滅亡

神宗ノ萬曆十一年、清祖愛親覺羅氏、遼左ニ起テヨリ、連リニ諸部落  
 ナ併セ、其勢強大明兵之ト戰ヒ、屢敗ス、時ニ日本豊臣秀吉、其將小西  
 行長、加藤清正等ヲ遣ハシ、朝鮮ヲ陷レ、直ニ明ニ侵入スルノ勢アリ  
 シヲ以テ、明大兵ヲ發シテ、朝鮮ヲ助ケシム、後關白秀吉ノ死ニ由テ、  
 日本ノ兵退去シタリト雖モ、國ノ南北ニ大兵ヲ發シタルヨリ、國庫  
 窮乏セリ、帝之ヲ償ハンカ爲ニ、盛ニ新稅ヲ課シ、人民甚々困シム、是  
 ニ於テ、人民兵器ヲ取テ政府ニ抗シ、盜賊蜂起シ、政令行ハレス、加フ



ルニ熹宗ノ世、魏忠賢ノ專恣アリテ大ニ朝廷ヲ亂タシタルヲ以テ、  
 毅宗ノ時ニ至テハ、外ニハ清兵ノ京師ニ逼ルアリ、内ニハ李自成等  
 ノ政府ニ叛クモノアリテ、殆ト支持ス可ラス、賊中李自成、張獻忠最  
 モ強シ、李自成遂ニ京師ニ逼リ、之ヲ陷ル、帝煤山ニ登リ、衣襟ニ書シ、  
 詔ヲ爲テ曰ク、朕登極ヨリ十七年、逆賊京師ニ逼ル、朕薄德匪躬、上天  
 咎ヲ干スト、雖モ然レモ皆諸臣ノ朕ヲ誤マルナリ、朕死シテ面目ノ  
 祖宗ヲ地下ニ見ルナシ、賊朕カ屍ヲ分裂スルニ任ス、百姓一人ヲ傷  
 クル勿レト、帛ヲ以テ山亭ニ縊ル、王承恩從死ス、明ノ臣吳三桂、援ヲ  
 清ニ乞ヒ、李自成ヲ討チ、陝西ニ走ラシム、神宗ノ孫、由松、賊ヲ避ケテ  
 淮安ニアリ、衆推戴シテ賊ヲ討セント欲シ、立テ帝トス、後、幾時モナ  
 ク、清ノ豫王、多鐸ノ爲ニ獲ラル、是ニ於テ鄭芝龍等、會議シテ太祖ノ  
 裔ナル帝聿釗ヲ福州ニ立ツ、芝龍專ラ兵餉戰守ノ事ヲ司トル、鄭氏

族岡ニアツテ甚々富ム、城ヲ廈門ニ築  
キ安平鎮ト號ス、一門ノ聲勢炬赫タリ、後チ芝龍、密ニ款ヲ清ニ通シ、敢テ清  
 兵ヲ拒カス、帝贛州ニ幸セントシ、途ニ清兵ノ爲ニ擒ヘラレ、后ト共  
 ニ市ニ斬ラル、清軍、書ヲ以テ芝龍ヲ招ク、芝龍大ニ喜フ、其子成功、泣  
 テ諫テ曰ク、父子ニ忠ヲ教フ、貳ヲ以テスルヲ聞カス、且北虜何ノ信  
 カ之アラソ、諸弟亦諫ム、芝龍聽カスシテ降ル、康熙元年芝龍其子孫ノ京  
ニ在ル者ト共ニ皆戮セラル、鄭成功、大艦ニ乘シテ南澳ニ至リ、兵數千人ヲ得テ、神宗ノ孫、帝由  
 榔ヲ立ツ、梧州及桂林ニアリテ、屢、清兵ト戦ヒ、兵勢振ハス、帝緬甸ニ  
 走ル、鄭成功、臺灣ニ據リ、恢復ヲ計ル、臺灣ノ地タル、北緯二十一度五分ヨ  
百四十英里、廣サ平均七十五英里アリテ、支那本土ヲ隔ル、一百英里、海中ノ一嶋ナリ、  
鄭氏ノ以前ニアツテハ、漢人此地ニ至ルモノナシ、日本人或荷蘭人ノ此ニ據リタル  
トニ三金一牛ヲ給シ、荒地ヲ墾セシム、芝龍ノ去リタル後、蘭人此ニ據リ、堡砦ヲ設ク、  
是ニ至テ成功、蘭人ヲ逐ヒ臺灣ヲ占有セリ、現今ハ人口支那人此ニ據リ、堡砦ヲ設ク、  
四百萬番人六萬餘アリテ、獨立ノ一省ヲナシ、劉銘傳巡撫タリ、帝緬甸ニアルニ  
 當テ、吳三桂兵ヲ率テ薄リ撃チ、左右百餘人ヲ殺シ、帝ヲ奉シテ滇



ニ遷ル、後三年、帝溟城ニ崩ス、太祖ノ洪武元年ヨリ毅宗ノ崩スルニ至ルマテ、十六世二百七十六年、其後又三世二十年ニシテ明全ク亡フ、是ヨリ先キ鄭成功臺灣ニ卒シ、諸弟猶ホ永曆ヲ稱スル十九年鄭克塽ニ至リ清ニ降ル、

按スルニ、明祖ハ諸子ヲ封シ、宦官ヲ制シ、功臣ヲ除キ、循吏ヲ用非テ、前諸代ノ政府カ蒙ムリタル諸弊害ヲ除カント力メタレ、世帝ハ位ヲ燕王ニ奪ハレ、三世ヨリ以後、宦官屢朝廷ヲ亂タシ、縣官亦勢ヲ持ンテ人民ヲ壓シ、之ヲシテ艱苦ニ陥ラシメ、續テ内訌ノ災ヲ發シタリ、是ニ由テ外患京師ニ近ツクモ、之ヲ防禦スルノ力ナク、遂ニ前ニ關外ニ退ケタル滿州人ノ爲ニ、再ヒ其地ヲ失ヘリ、此ノ如キハ支那歷代ノ通弊ニシテ、固ヨリ一定不變ノ憲法ノ如キモノアルナク、創業ノ主若クハ中興ノ英主アリテ、至良ノ制度ヲ立ツルモ、數世ヲ經サルニ、早ク既ニ制度弛廢シテ、言フ可ラ

サル禍害ヲ生シ、終ニ亡滅ノ結果ヲ來タスニ至ル、

第三十二章

明ノ制度文物等

邦制及官制

明ノ時、天下ヲ分ツテ十五省トス、南直隸ハ、南京應天府ニ屬シ、北直隸ハ、北京順天府ニ屬ス、漢ノ三輔、唐ノ關内道ノ如ク、天外ニ十三省、山東、陝西、河南、浙江、江西、湖廣、四川、福建、廣東、廣西、雲南、貴州、アリテ、合セテ十五省ナリ、省ヲ分ツテ、府、州、縣等トス、各省ニ按察使、布政使アリテ、之ヲ統轄シ、按察使ハ、刑罰、按劾ノ事ヲ掌ル、布政使ハ、省ノ政務ヲ掌ル、又府ニハ知府アリ、州ニ知州アリ、縣ニ知縣アリテ、各之ヲ統フ、府ト州トハ、地勢ニ由テ名稱ヲ異ニスルモノニシテ、必シモ州ハ府ニ屬セス、又小州ノ下ニハ縣ナクシテ、直ニ府ニ屬スルモノアリ、府ノ總數百四十九州百二十八縣千百五アリ、



爵位秩祿

明初メ中書省ヲ置キ、左右丞相等ノ官ヲ設ク、後チ吏、戶、禮、兵、刑、工ノ六部ヲ置キ、又更ニ尙書、侍郎等ノ官ヲ設ケテ、之ヲ中書省ニ屬シタリシカ、其權ヲ專ラニスルヲ虞リ、中書省ヲ廢シ、丞相ヲ罷メ、子孫ヲシテ誓テ、設立スルコトヲ許サス、若シ之ヲ奏請スル者アラハ、其人ヲ凌遲ノ刑ニ處シ、全家ヲ死ニ處スルノ法ヲ定ム、六部ノ外ニ、都察院、通政司、大理寺等ノ官府アリテ、綜理甚タ周密ナリ、

爵ニ三等アリ、公、侯、伯、是ナリ、又品一ヨリ九ニ至ル、凡テ九等、各品ニ正從アリ、文散官ハ、正一品榮祿太夫ヨリ、從九品登仕佐郎マテ、九等十八級アリ、武散官ハ、正一品榮祿太夫ヨリ、從六品忠武校尉マテ、六等十二級アリ、散官ハ、唯空名ニシテ、給俸ハ品ニ從フ、

親王ハ俸萬石ヨリ、鄉君、儀賓二百石ニ至ル、鄉君ハ宗室ノ女、儀賓ハ其婿ナリ、其他文武ノ百官、公、侯、駙馬、伯等ノ爵アル者ハ、五千石ヨリ八百石ニ至ル、國初

兵制

官田ノ法アリシカ、後チ之ヲ廢セリ、又正一品ノ歲俸千四十四石ヨリ、從九品六十石ニ至ル、是ヲ本色俸ト、折色俸トニ分ツ、

明初メ府州縣ヲ定メ、赤白ノ二旗ヲ郊ニ立テ、兵タルヲ願フ者ハ、赤旗ノ本ニ立チ、農タルヲ願フ者ハ、白旗ノ本ニ立テシメ、因テ籍ニ著シテ、軍民ヲ分ツト、又錦衣等ノ十二衛ヲ設ケテ、宮禁ヲ衛ラシム、是ヲ親軍指揮使司ト云フ、又留守等ノ四十八衛アリテ、京城ヲ衛ル、五軍都督府ニ屬ス、又百戶、千戶ト稱スル兵備アリ、百戶所ノ兵員ハ百十二人アリテ、其内ニ總旗二人、カシラ小旗十人、コカシラアリ、百戶所ヲ十箇合セタルモノヲ千戶所ト云フ、千戶所ヲ五箇合セテ衛ト云フ、大率五千六百人アリ、此衛所ハ京師ヨリ州縣ニ至ルマテ皆之ヲ設ケテ備ヘトス、

學制

明ノ南北兩京ニ國子監アリ、正義、崇志、廣業、脩道、誠心、率性ノ六堂ヲ



設ケテ、學規ヲ立ツ、生員四書ニ通シテ、未タ五經ニ通セサルモノハ正義、崇志、廣業ノ三堂ニ居リ、學ハシム、一年半ヲ經テ、文理明ヲカナル者ハ、脩道、誠心ノ二堂ニ升ル、又一年半ノ後チ、文理優ニシテ、經義ニ兼テ通スル者ハ、率性堂ニ升ルコトヲ得ル、生員ノ出席ヲ點シテ七百ノ數ニ滿タサレハ、率性堂ニ升ルコトヲ許サス、大學ノ外ニ、府、州、縣各學校アリ、在京ノ府學ハ、生員六十人、他ノ府學ハ四十人、教授一人、訓導一人アリテ、教授ヲ掌ル、州學ハ生員三十人、學正一人、訓導三人アリテ、之ヲ掌ル、縣學生員三十人、皆民間ノ子弟ヲ撰テ、之ヲ補フ、因テ其家ノ徭役二人分ヲ免ス、右生員ハ時ニ由テ増減アリ、又軍衛アル所ニハ、別ニ衛學ノ設アリ、又他ニ醫學、陰陽學等アリ、府、州、縣ノ生員ニシテ、俊秀ナル者ハ、試驗ヲ受ケテ、國子監生ニ補セラル、

刑辟

國家ノ法ヲ執ルモノ、刑部、都察院、大理寺トス、是ヲ三法司ト云フ、院ハ、前世ノ御史臺ナリ、此ノ三司ニテ總テ天下ノ刑罰ヲ判決ス、明ハ徒刑及流刑ニモ、又杖罪ヲ加フ、又五刑ノ外ニ遷徙ト云フ刑アリ、是レ郷土ヲ遷離スルコトニシテ、千里ノ外ニ謫スルヲ云フ、

- 答刑五 十ヨリ五十ニ至ル、
- 明ノ杖刑五 六十ヨリ百ニ至ル、
- 徒刑五 一年ヨリ三年ニ至ル、又一年ニハ杖六十ヲ加ヘ、三年ニハ杖百ヲ加フ、
- 流刑三 二千里ヨリ三千里ニ至ル、杖各一百ヲ附加ス、
- 死刑二 絞及斬、

租稅

明ハ唐ノ兩稅ノ法ニ從ヒ、夏ハ麥ヲ取リ、秋ハ米ヲ取ル、是ヲ夏稅、秋量ト云フ、人數ニ由テ稅ヲ課スルコトナク、田地ノ廣狹ニヨリテ年貢ヲ定ム、夏稅ハ八月ヲ過クルヲ得ス、秋稅ハ明年二月ヲ過クルヲ



貨幣

得ス、又天下ノ稅課司ニ令シテ、商貨三十分ノ一ヲ稅ス、凡ソ貨物ノ品ニ從テ、直ニ三十分ノ一ヲ課スルモノアリ、金、銀、鉛等ノ礦物、是ナリ、又魚、茶、酒ノ如キ類ハ、金、銀ニ換ヘテ之ヲ收ム、五穀、醋、書籍、紙ノ類ハ、稅セス、明ノ稅ハ、唐宋ニ比スレハ稍寬ナリトス、

明ハ資源、寶泉ノ二局ヲ於テ、錢ヲ鑄ル事ヲ司トラシム、太祖吳王タル時、大中通寶ヲ鑄ル、大中ハ錢ノ名ニシテ、年號ニ非ス、洪武以來、代々錢ヲ鑄ル、皆年號ヲ以テ銘トス、小錢ヨリ當十錢マテ、五種アリ、當十錢重サ一兩、當五錢重サ五錢、當三、當二重サ各其數ニ準ス、小錢ハ重サ一錢ナリ、洪武年間令ヲ出シ、生銅一斤ヲ以テ、小錢百六十ヲ造リ、折二ハ八十、當三五十四ト次第ニ此割合ナリ、當時百六十目ヲ壹斤トス、故ニ小錢ノ重サ一錢ニ當ルナリ、

洪武、永樂、宣德ノ舊錢ハ、每八文ヲ以テ銀一分ニ折フ、八十文ヲ以テ

戶口

銀一錢ニ折フ、明末ニハ五十文ヲ以テ銀一分トシタリ、是レ偽錢多ク、其價賤シキカ故ナリ、明ノ太祖洪武八年ニ、中書省ニ詔シテ、大明寶鈔ヲ作ラシム、其種類六アリ、上鈔一貫ハ銅錢千文、銀一兩ニ折フ、以下五百文、四百文、三百文、二百文、一百文アリ、宋ノ交子、元明ノ寶鈔、皆唐ノ飛錢ニ原因シ、券ヲ以テ錢ニ換ヘ、使川スルナリ、

明ノ會典ニ、洪武、弘治、萬曆、三代ノ戶口ヲ記ス、左ノ如シ、

洪武二十六年

戶、千六十五萬二千八百七十、

口、六千五十四萬五千八百十二、

弘治四年

戶、九百一十一萬三千四百四十六、

口、五千三百十八萬千五百五十八、



萬曆六年

戶、千六十二萬千四百三十六、

口、六千六十九萬二千八百五十六、

第三十三章

清

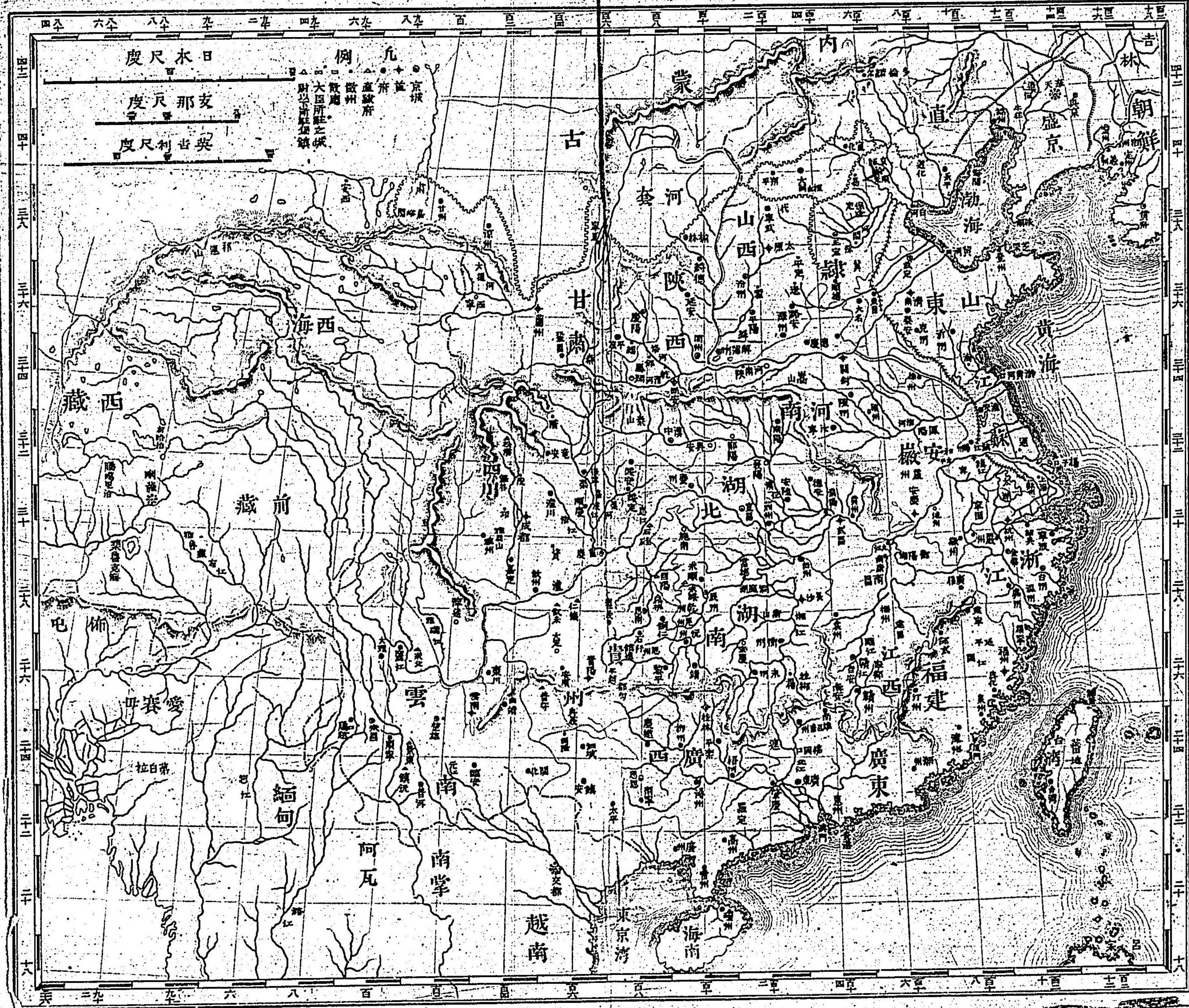
神武紀元二千三百〇四年ヨリ

太祖兵ヲ起ス

太祖名ハ努爾哈赤其姓ヲ愛親覺羅氏ト云フ、明ノ萬曆十一年、滿州ノ尼堪外蘭、太祖ノ父祖ヲ害シテ圖倫城ニ據ル、太祖怒リテ兵ヲ起シ、其城ヲ襲フテ之ニ克ツ、時ニ年二十五、僅カニ父ノ遺甲三十副、兵百人アルノミ、後外蘭ヲ斬リ、父祖ノ仇ヲ復ス、是ヨリ太祖諸部落ヲ併セ、兵食強富ナリ、年六十一ニシテ師ヲ興シ、明ヲ伐ツ、行クニ臨テ、七大恨ヲ書シテ、天地ニ誓告シ、兵二萬ヲ以テ、撫順城ヲ圍ミ、之ヲ陷



清ノ圖





世祖支那ヲ一統ス

レ、復タ清河城ニ克チ、轉戦利ヲ得サルコトナシ、惟、寧遠城ヲ攻ムルニ當テ、下スコトヲ得ス、太祖憚ハサル數日、終ニ崩ス、年六十八、太祖崩シテ太宗嗣キ、聰明ニシテ能ク人ヲ用、屢、明軍ヲ敗リ、親ヲ朝鮮ヲ伐テ之ヲ降シ、國ヲ清ト號ス、此時ニ當テ清ノ疆土日ニ廓ク、明ノ國力漸ク屈シ能ク抗スルナシ、太宗崩シテ世祖繼テ立チ、明ノ將吳三桂ノ援ヲ乞フニ、遇テ、賊李自成ヲ掃蕩シ、遂ニ明ニ代リテ天下ヲ定ム、

世祖剃頭ノ令ヲ發ス

禮部ニ諭シテ曰ク、向來剃頭ノ制、急ニ畫一セス、姑ク自便ヲ聽ルセシ者ハ、天下ノ定マルヲ俟テ、此事ヲ行ハント欲シテナリ、朕已ニ之ヲ籌ル熟セリ、君ハ猶父ノ如ク、民ハ猶子ノ如シ、父子一體、豈違異ス可シヤ、若シ一ニ歸セサレハ、終ニ二心ニ屬ス、異國ノ人タルニ幾カ、ラスヤ、此事朕カ言ヲ俟タサルナリ、想フニ臣民亦之ヲ明カニス、



今ヨリ布告ノ後、京城内外旬日ヲ限リ、直隸各省ノ地方ハ部文到ル  
ノ日ヨリ亦旬日ヲ限リ、盡ク剃髮ヲ行ヘ、違奉スル者ハ我國ノ民  
リ、遲疑スル者ハ則チ命ニ逆フノ寇ニ同シ、必ス重罪ヲ加ヘン、若シ  
規避シテ髮ヲ惜ミ、巧辭爭辨スルトモ、決シテ輕貸セス、該地方ノ文  
武百官、各究察シテ剃ヲ驗セヨ、其次帽裝束ハ、便宜更易スルヲ許ス  
モ、悉ク滿州ノ俗ニ從テ異ナル勿レト、此ノ嚴令ハ、明人ノ頗ル好マ  
サル所ニシテ、寧ロ頭ヲ失フモ頭髮ヲ剃ルニ忍ヒサル者アリテ、難  
髮ノ亂起リ、其勢一時猖獗ナリシカ、漸クニシテ、平定シ其令全國ニ  
行ハル、只福建ノ人民ハ、今日ニ至ルマテ一種ノ頭巾ヲ戴テ、剃髮ヲ  
隱蔽スルノ風アリ、

世祖ノ治績

世祖明ニ代リテ、支那ヲ一統シ、明ノ餘類ヲ平ケ、意ヲ政務ニ致シ、民  
心ヲ得テ海内ヲ綏ス、先ツ滿漢官民ノ和睦ヲ計リテ、互ニ婚姻スル

ヲ許シ、又心ヲ學事ニ留メ、大學ニ幸シテ先聖孔子ヲ釋奠シ、文華殿  
ヲ作リテ經筵日講ノ地トス、帝ハ特ニ内官ヲ制シ、鐵牌ヲ諸衙門ニ  
立ツ、諭シテ曰ク、中官ノ設、古ヨリ廢セスト、雖モ、然レモ任使宜ヲ失  
ハ、遂ニ禍亂ヲ貽ス、近コロ明朝ノ王振、汪直、劉瑾、魏忠賢等ノ如キ、  
專ラ威權ヲ擅ニシ、政ニ預カリ、無辜ヲ枉殺シ、其鎮ニ出ルニ及ンテ  
毒ヲ邊境ニ流ス、甚シキハ不軌ヲ謀リ、忠良ヲ害シ、國事日ニ非ニシ  
テ、覆敗相尋ク、鑒戒トナスヘシ、朕今、内官衙門及員數職掌ヲ裁定ス、  
法制甚ク明カナリ、後法ヲ犯ス者アテハ、即チ凌遲ノ刑ニ處セント、  
帝在位十八年、壽二十四、

康熙帝ノ治世

世祖ノ太子玄暉、位ニ即ク、之ヲ聖祖トス、康熙帝是ナリ、帝志量恢宏、  
十四歳ニ至テ、自ラ政ヲ行ヒ、才智俊邁、能ク政務ヲ理ス、  
佛王路易十四  
世ハ西曆千六  
百六十一年即位シタリ、帝ノ即位ハ其翌年ニシテ、後五十餘年間、  
此二帝王東西ニ相並ンテ能ク國ヲ治メテ威ヲ外邦ニ耀カセリ、帝ノ時、吳三桂



反シ、初メ吳三桂、授テ清ニ乞ヒ、李自成ヲ討テヨリ、清ノ爲ニ力ヲ盡シ、功ヲ以テ平  
 爲ク、我功大ナリ、朝廷我藩ヲ奪ハスト、先ツ朝旨ヲ探ラシカ爲ニ、疏シテ藩ヲ撤セン  
 ト請フ、朝廷之ヲ許ス、令下ルニ及ンテ愕然タリ、而シテ兵ヲ擧グルノ名ナシ、明ノ後  
 テ立ント欲スレハ、緬甸ノ役自ラ解スヘキナシ、又遷延シテ謀ノ泄レンコトヲ恐レ  
 テ、遂ニ反ス、遠近之ニ應スル者多ク、明ノ制ニ復シ、服ヲ更ヘ、號ヲ著ヘ、帝號ヲ稱スル  
 ニ至リシカ、三桂死シテ、兵勢、諸賊亦之ニ應シタリシカ、卒ニ平クルコト  
 日ニ懸マリ、餘黨亦次テ平ク、諸賊亦之ニ應シタリシカ、卒ニ平クルコト  
 ナ得タリ、帝在位ノ間、西藏ヲ親征シ、又兵ヲ西域ニ出シテ、大ニ其版  
 圖ヲ擴メタリ、支那ノ法律、制度、及風俗等ノ鞏固ヲ致シテ、今日ニ至  
 ルマテ變セサル所以ハ、此帝ノ在位久シカリシヲ以テナリ、帝ハ深  
 ク文學ヲ好ミ、賢良ノ吏ヲ用ヰ、以テ民福ヲ増進スルコトニ注意セ  
 リ、又帝ハ外國ニ對シテ偏頗ノ心ナク、自由ニ貿易スルヲ許シタリ、  
 故ニ外國ノ宣教師等、帝ヲ賞讃シテ、英王、アルフレッド、佛王、ルネ九  
 世ニ比シタリ、

緬甸ヲ征ス

乾隆帝、緬甸ヲ征シテ、其地ヲ得ント欲シ、大學士楊應琚ヲシテ行テ

教匪ノ亂

之ヲ討タシム、應琚、永昌ニ至リ、先ツ緬ニ檄シテ言フ、天兵數十萬境  
 上ニ陣ス、降ヲサレハ則チ進討セント、緬人之ヲ聞キ、大ニ兵ヲ發シ  
 テ、清軍ヲ撃チ之ヲ敗ル、將軍明端、又大舉シテ緬ヲ征シ、柵ヲ破リ、勝  
 ニ乘シテ進ミ、深ク入ルコト二千餘里、糧盡ギ道險シク、敵兵逼リ撃  
 ツ、援兵至ラス、將士奮戰シ、一以テ百ニ當ル、將軍觀音保數矢ヲ發シ、  
 連リニ敵ヲ殲ス、尙ホ一矢ヲ餘ス、矢ヲ注シ復タ射ント欲シ、既ニシ  
 テ手ヲ停メ忽チ馬ニ策シテ去リ、其蹶ヲ以テ喉ヲ刺シテ死ス、明端  
 亦數創ヲ負ヒ、蠻手ニ落ツルヲ慮リ、從容トシテ馬ヨリ下リ、手自ラ  
 辮髮ヲ斬リ、家丁ニ授ケ歸リ報セシム、而シテ後樹下ニ楹ル、帝復タ  
 大軍ヲ發シ、傳恆ヲシテ緬甸ヲ征セシメ、大ニ勝ツ、緬酋書ヲ致シテ  
 款ヲ納レ、方物ヲ獻シ、入貢ヲ請フ、遂ニ軍ヲ還ヘス、  
 山東ノ奸民、王倫、邪教ヲ以テ無賴ノ徒ヲ集メ、城ヲ襲ヒ吏ヲ戕フ、時



鴉片ノ亂

ニ承平日久シク、官民皆兵ニ習ハス、賊劫掠ヲ繼ニス、總兵惟一、亦賊ヲ擊テ敗ス、乾隆帝惟一ヲ斬リ以テ徇フ、援兵漸ク集リ、城ヲ圍ムコト敷重、賊樓ニ登リ、火ヲ繼テ死ス、是ヨリ後、回教ノ徒、馬明心、朗誦ノ法ヲ傳ヘ、新教ト號シ、默誦ノ舊教ト相仇トシ、舊教ノ徒數百人ヲ殺ス、官兵之ヲ討チ、賊首馬明心ヲ捕ヘテ之ヲ誅ス、後又白蓮教徒劉之協等教ヲ唱ヘ、徒ニ授ケ、川陝湖北ニ徧チク、日久フシテ其黨益衆シ、遂ニ不軌ヲ謀リ、同教徒王氏ノ子、發生ト云フ者ヲ以テ、詭テ明裔朱姓トシ、以テ流俗ヲ煽動ス、後遂ニ其黨誅ニ伏ス、發生幼童ナルヲ以テ死ヲ免カル、是ヨリ先キ、乾隆帝屢、大軍ヲ起シテ緬甸ヲ征シ、國庫甚ク窮乏シタルヲ以テ、私鑄私鑄ヲ嚴禁シ、且重稅ヲ課シタルヨリ、人民官ヲ讎トシ亂ヲ思フ、奸民機ニ乘シテ煽惑シ、屢亂ヲ起セリ、道光帝位ニ即クニ及ンテ、支那國民一般ニ鴉片喫烟ノ弊風甚ク盛

ニシテ、皇子亦鴉片烟ノ毒ニ罹リテ死セリ、故ニ政府ニ於テモ鴉片貿易ヲ禁スルノ議ニ決セリ、然レモ英國商人及他ノ外國人等ハ鴉片貿易ノ爲メ、支那人ニ如何ナル害毒アルモ、決シテ此貿易ヲ廢ス可ラスト決定セルヲ以テ、支那政府モ頗ル其處理ニ苦メリ、然レモ政府ハ此貿易壓制ノ爲ニ力ヲ盡シ、支那商ノ鴉片ヲ輸入スル者數人ヲ死刑ニ處シ、又鴉片ヲ使用スル者ニハ非常ナル罰金ヲ課シ、又ハ死刑ヲ以テ之ヲ恐嚇シタリシカ、皆無効ニ屬シタリ、時ニ林則徐、廣東ノ總督トナリ、鴉片ヲ嚴禁シ、貿易ヲ罷メシメ、且英商ニ命シテ、其蓄フル處ノ鴉片ヲ悉ク支那官吏ニ交附セシメントシ、嚴ニ兵備ヲ張テ之ニ臨ム、英商懼レテ千餘函ヲ呈ス、則徐未ダ其數ヲ盡サ、ルヲ責ム、英商抗辨シテ服セス、則徐内地ノ民ニ命シテ、之ニ飲食ヲ輸送スルヲ絶ツ、英商窮窘シテ終ニ悉ク之ヲ致ス、其數總テ二萬餘



函此價殆ト一千一百萬弗ナリ、悉ク此鴉片ヲ消燼シ、十六人ノ外商  
 ナ追放シ、自餘ノ者ハ、以後決シテ此不正ノ貿易ニ從事セストノ誓  
 書ヲ出サシム、其後諸外國トノ貿易ヲ許シタルニ、惟英人ヲ拒絕セ  
 リ、是ニ於テ英人戰艦ヲ以テ廣東ニ入り、請テ曰ク、互市ヲ復セハ則  
 チ已ム、否ヲサレハ戰アルノミト、則徐應セス、英人官船ニ寇シテ去  
 ル、西曆千八百四十一年七月四日、英將、エリオット(Elliott)軍艦五艘  
 漁船三艘、運漕船二十一艘ヨリ成ル所ノ一大艦隊ヲ以テ來リ、舟山  
 ナ取リ、浙東ノ郡縣ヲ略ス、朝廷、欽差大臣伊里布等ニ命シテ和ヲ講  
 セシメ、則徐ノ職ヲ褫フ、然ルニ伊里布等ノ處置亦宜ヲ失シタルヲ  
 以テ、再ヒ林則徐ヲ任用シ、伊里布等ノ職ヲ罷ム、時ニ英國印度ノ鎮  
 將、璞鳴查(Sir Henry Pottinger)兵三萬餘ヲ率非テ來リ、援ク、斯ニ於テ英  
 軍益振ヒ、遂ニ南京ニ逼ル、帝防ク可ヲサルヲ知リ、復タ伊里布等ヲ

シテ和ヲ講セシム、其條約ノ條款ハ左ノ如シ、曰ク自今兩國ノ間ニ  
 平和ヲ保持スル事、曰ク廣東、廈門、福州、寧波及上海ノ五港ヲ開テ英  
 國ノ貿易ヲ許シ、且明瞭ナル稅則ヲ設クル事、曰ク香港ヲ英國ニ割  
 キ與フル事、曰ク鴉片ノ損害及ヒ軍費ノ辨償トシテ、二千百萬弗ヲ  
 西曆千八百四十六年一月一日前ニ出スヘキ事、曰ク兩國互ニ囚虜  
 ナ放免シ、且支那人ニシテ英人ニ與シタル者ヲ赦免スル事、曰ク支  
 那ヨリ前ニ定メタル金額ヲ納ルニ隨テ、英人ノ略奪シタル浙東等  
 ノ土地ヲ返還スル事等ナリ、抑モ此戰爭タル、支那ニ於テハ國民ヲ  
 荼毒スル鴉片ノ害ヲ除カントシタルヨリ起リシモノニシテ、固ヨ  
 リ正理ト云フヘシ、而シテ戰ヲ交ルニ至テ、泰西文明ノ利器ニ敵ス  
 ヘキニ非ス、連リニ敗レテ此國辱ヲ取ルニ至レリ、然レハ此戰爭ニ  
 由テ支那從來自負尊大ノ陋習ヲ破リ、諸外國ヲ視ルコト、夷狄ノ如



長髮賊

キノ迷夢ヲ覺シタルノ利ヲ得タリ、道光三十年、廣東ノ逆民洪秀全、楊秀清、馮雲山等亂ヲ桂平縣ノ金田ニ起ス、秀全ハ廣東ノ人、年四十、膽略アリ、略字ヲ識ル、天主教ヲ奉シ、自ラ天父ノ第二子トシ、耶穌ヲ天兄ト稱セリ、曰、兵士教ノ爲メニ戰死スル者ハ升天シテ福ヲ受クルト、嘗テ秀全病ニ極メテ危ウシ、癒ユルニ及ンテ詭テ曰ク、病死七日ニシテ蘇ル、能ク未來ノ事ヲ知ルト、總テ會ニ入ル者ヲ兄弟姉妹ト稱シ、僞號ヲ建テ太平天國ト號シ、自ラ天王ト稱ス、清人呼テ長髮賊ト云フ、此賊ノ猖獗ヲ極メタル際、道光帝崩シテ、咸豐帝位ニ即ク、帝ノ時、長髮賊ハ南部ノ諸州ヲ掠メ、遂ニ南京ニ迫リ之ヲ陷ル、朝廷防クニ術ナク、英將「ゴルドン」ヲ聘シテ賊ヲ討滅スルノ任ヲ囑シ、總督李鴻章、曾國藩ヲシテ共ニ賊ヲ討タシム、是ヨリ四方ニ轉戰シ、互ニ勝敗アリシカ、同治帝ノ時ニ至リ

英佛ノ軍北  
京ヲ圍ム

テ漸ク平定セリ、此反亂ノ爲ニ支那ノ内地殆ト二千英里ノ間、都邑村落頽廢ニ歸シ、人命ヲ損スルコト二千萬ノ多キニ及フト云フ、此亂ハ西曆千八百五十年ニ起リ、六十四年ニ終ル、始メ洪秀全ハ耶穌教徒ナリト稱シ、支那政府ノ暴虐壓制ナルヲ唱ヘテ之ヲ改革シ、更ラニ善良ナル政府ヲ組織セント宣言シタルヲ以テ、居留ノ外國人モ頗ル之ニ左袒シタリシカ、逆徒漸ク進ミ、上海ノ近傍ニ至リ、擅ニ人民ヲ劫カシ、貨財ヲ掠ムル等ノ事アルヲ見テ、始テ其僞善者ナルヲ認メテ、外國人等モ政府ヲ助ケテ之ヲ攻撃シ、終ニ能ク鎮定スルヲ得タルナリ、文宗ノ咸豐六年、廣東ノ人、英ノ商船ヲ掠奪ス、英官其暴舉ヲ訴フ、官吏輕視シテ理セス、英將怒テ兵ヲ發シ、廣東ノ諸砦ヲ撃ツ、清軍之ヲ拒ク、是ヨリ連年兵ヲ構フ、後チ英佛二國同盟シテ廣東ニ寇シ、白河



ニ入り、諸砦ヲ破リテ直ニ天津ニ至ル。帝北京ニ侵入セラレシコトヲ懼レ、天津ニ至テ和ヲ講セシム。二國請フテ曰ク、天津及諸港ノ互市ヲ許シ、耶蘇教ヲ中國ニ弘メ、官其教ヲ奉スル者ヲ保護シ、公使ヲ北京ニ在留スルヲ許スヘシト。明年英佛二國ノ使臣天津ニ至リ、前年ノ請ヲ述フ、其船白河ニ入ルニ及ンテ、清兵不意ニ砲撃シ、數十人ヲ斃ス、使臣僅カニ身ヲ以テ免カル。是年英佛ノ兵二萬人進テ北京ニ迫ル、清兵支フル能ハス、相率テ奔潰ス。帝大ニ驚キ、后妃及諸王ヲ率テ北ニ走リ、皇弟恭親王ヲ留テ京師ヲ守ラシム。時ニ英佛ノ兵已ニ京師ニ迫ル、恭親王急ニ使ヲ馳セテ和ヲ議ス。英將俘ヲ縱チ、盟ヲ修ムルノ事ヲ請ヒ、期スルニ三日ヲ以テス。曰ク、若シ期ヲ過キ報ヲ得スハ直ニ北京ヲ衝カント。恭親王ノ報期ヲ逾エテ至ラス、二國ノ兵進テ北京ニ入り、火ヲ縱テ夏臺及圓明園ヲ燬ク。恭親王遂

好チ日本ニ  
通ス

ニ其ノ請フ所ヲ聽ルシ、二國ニ與フルニ各償金千二百萬兩ヲ以テシ、又牛莊、登州、臺灣等ノ七互市場ヲ開キ、和議成ル。同治八年、日本柳原前光、國書ヲ致ス、其略ニ曰ク、大日本國從三位外務卿清原宣嘉等、書ヲ大清國總理外國事務大憲臺下ニ致ス、我カ國往昔ヨリ貴國ト往來シ、交誼殊ニ深シ、方今西洋諸國ト約ヲ定メテ貿易スレド、未ダ曾テ貴國ト約ヲ結ハス、竊カニ思フ、兩國友誼餘リアリテ、名分定マラサルノ嫌ヲ免カレス、而シテ盟約ノ事終ニ久シク曠シクヘカラス、因テ今柳原前光等ヲシテ貴國ニ往キ、通信通商ノ事ヲ定メシム云々、十一年日本ノ領事官來リテ、通交ノ事務ヲ總フ、領事官ノ本廳福州ニアル者ハ、廈門、臺灣、淡水ノ事務ヲ兼管ス、上海ニアル者ハ、鎮江、漢江、九江、寧波ヲ兼管シ、香港ニアル者ハ、廣州、汕頭、瓊州ヲ兼管ス、



日本辦理大臣大久保利通來ル

同治十三年、日本辦理大臣大久保利通來リ、攝政恭親王等ニ會シ、盟約ヲ成シ、駐臺ノ師ヲ撤ス、是ヨリ先キ、我日本備中ノ民、及琉球人、台灣生蕃ノ地ニ漂到シ、蕃人ノ爲ニ殘害セラル、是ニ於テ日本問罪ノ師ヲ起シ、陸軍中將西郷從道ヲ以テ、蕃地ノ事務總督ニ任シ、兵艦五隻ヲ率ヰテ台灣ニ到ラシム、一戰ニシテ牡丹社酋長ヲ斬リ、武威大ニ振フ、生蕃十八社ノ酋長降ル者相踵ク、從道龜山ニ營シ、專ラ剿撫ヲ務ム、清國生蕃ノ境、其屬地ニ聯ナルヲ以テ、我日本ノ兵ヲ撤センコトヲ求ム、日本肯セズ、兩國ノ釁將ニ開ケントス、日本ハ參議兼內務卿大久保利通ヲ以テ、全權辦理大臣ニ任シ、清國ニ使シ、兩國ノ紛紜ヲ解カシム、利通上海ニ航シ、轉シテ北京ニ入り、清國政府ト生蕃ノ所屬ヲ論ス、數日ニシテ決セズ、利通議ノ協ハサルヲ見テ、憤然將ニ去ラントス、時ニ英國公使北京ニアルモノ、其間ニ入りテ調停シ、

伊犁ノ爭亂

周旋甚々至レリ、和議終ニ成ル、恭親王、軍機大臣寶鋆等相共ニ會議シ、兩國和好ノ條款ヲ建テ、鈴印ヲ連署シテ交換ス、銀貨五十萬兩ヲ日本ニ納レ、台灣ノ兵ヲ撤セシム、時ニ同治十三年十一月十三日、日本ノ明治七年十二月二十日ナリ、從道等兵ヲ撤シ去ル、光緒帝即位ノ始、伊犁地方ノ人民事ニヨリテ、魯西亞ノ人民ヲ殺害セリ、伊犁地方ハ魯領ト接スルヲ以テ、魯ノ人民伊犁地方ニ來タルモノ多シ、此爭亂ニ乘シテ、魯國政府ハ速カニ兵ヲ出タシテ之ヲ鎮撫シ、其商人等ヲ保護スルヲ名トシテ、敢テ兵ヲ退ケス、北京政府ハ、魯國駐劄ノ清國ノ公使ヲシテ、魯國政府ト談判ヲ開ラキタレ、要領ヲ得ス、是ヲ以テ公使ヲ召還シ、更ラニ有名ナル曾紀澤ヲ全權大使トシテ、魯都聖伯得堡ニ派遣シ、一時ハ兩國ノ間ニ兵端ヲ開カントスルノ勢ナリシカ、清國政府ハ遂ニ若干ノ償金ヲ出タシ、魯國政府ハ其兵ヲ撤スルコトヲ約シテ其局ヲ



佛軍ノ侵略

結ヒタリ

光緒九年清佛兵ヲ交ヘ陸海ノ戰爭數回ノ後遂ニ兩國和議ヲ結ヒ  
 タリ抑モ此戰爭ノ起因ハ安南ト佛蘭西トノ交渉事件ヨリ生シタ  
 ルモノニシテ安南ノ地ハ支那ノ南方ニ接シテ昔ヨリ朝貢ヲ怠タ  
 ラス故ニ清屬國ヲ以テ之ヲ見ル而シテ歐羅巴諸國ヨリ支那地方  
 ニ往來スルニハ安南ノ海ヲ過クルヲ以テ歐人ノ安南ニ來タルモ  
 ノ多ク佛國人亦商業及宣教ノ故ヲ以テ來リ住スルモノアリ清ノ  
 文宗ノ時安佛二國ノ爭ヲ生シ遂ニ西貢ノ地ハ佛ノ爲ニ奪ハレタ  
 リ後佛國ハ東洋ニ於テ益其版圖ヲ擴メシトテ謀リ其時機ヲ窺  
 ヘリ光緒八年佛安南ノ條約ヲ破リタルヲ名トシテ兵ヲ出タシ之  
 ナ攻ム是ヨリ先キ長髮賊ノ餘黨ニ劉永福ト云フ者アリ其徒ト共  
 ニ安南ニ走リ國王ノ恩澤ヲ以テ新々ニ地ヲ墾ラキ武ヲ練リ其勇

ニ誇レリ之ヲ黑旗兵ト稱ス安南王深ク此兵ヲ頼ミ意ヲ決シテ佛  
 軍ニ抗シ又使者ヲ清國ニ遣ハシ援兵ヲ乞フ清國之ニ應シテ兵ヲ  
 出タシ佛軍ト安南ニ戰フ

佛軍精銳清兵固ヨリ當ル能ハス黑旗兵亦佛軍ノ爲ニ敗ラレ安南  
 殆ト佛ノ有ニ歸セリ此時ニ當リテ清國政府ニ於テハ大臣ノ意見  
 一致セズ恭親王ハ和ヲ主トシ醇親王ハ戰ヲ主トセリ獨リ李鴻章  
 ハ和戰ノ間ニ立チ國難ヲ一身ニ負擔シ佛國ト議シテ平和ノ約ヲ  
 結ヘリ曰ク清國ハ安南ニ出ス所ノ兵ヲ退ソケ安南ノ保護國タル  
 權ヲ棄ツルコト曰ク清國ハ佛國ノ爲ニ雲南其他ニ貿易場ヲ設ク  
 ルコト曰ク佛國ハ清國ニ向テ償金ヲ求メサルコト等ナリ此ノ條  
 約ハ固ヨリ清國ニ一ノ得ル所ナシト雖佛國ノ強兵ニ敵スル可ラ  
 サルヲ以テ已ヲ得スシテ此ニ至ル



此約成リシ後、佛軍ハ清軍ノ駐屯セル諒山鎮ニ進行セシニ、清軍不意ニ砲撃シ、大ニ之ヲ敗ル。此敗聞ノ一タヒ佛國ニ達スルヤ、佛國政府ハ大ニ清國ノ不信ヲ責メ、二千萬磅ノ償金ヲ要求セリ。清國聽カス、是ニ於テ清佛復タ兵ヲ交フルコト、ナレリ。光緒十年七月佛軍ノ提督レスペーヌ軍艦數隻ヲ率ヰテ、臺灣ノ雞籠港ニ向ヒ、其砲臺ヲ毀チ、直ニ水兵ヲ上陸セシメ、雞籠港ヲ占領セリ。臺灣ノ巡撫劉銘傳之ヲ聞キ、大ニ怒リ、單身士卒ニ先ダチ、彈丸ヲ冑シテ進撃シ、佛軍ヲ追ヒ退ソケ、再ヒ上陸スルヲ得サラシム。

此戰爭ハ殆ト同時ニクルベシ提督ハ軍艦ヲ率ヰテ福州ヲ攻メ、清國ノ艦隊ヲ破リ、福州ノ船政局ヲ壞リ、其勢頗ル盛ナリシカ、福州ヲ占領スルニ至ラス。

又安南地方ヨリ進メル佛ノ陸兵ハ廣西地方ニテ連戰勝利アリシ

カ、勇猛ノ老將馮子材出ツルニ及ンテ、佛軍大ニ破レ、諒山復清軍ノ據ル所トナリ、子材益兵ヲ進メテ、安南ノ佛軍ヲ一掃セントスルノ勢ナリシカ、北京政府ノ停戰ノ命ヲ受ケテ止ミタリ。

此時佛國ノ宰相フエリー氏、人望ヲ失シテ、内閣ヲ退ソキシヲ以テ、清佛兩國間ニ再ヒ平和ノ約成レリ。此約ハ先キニ李鴻章ノ定メシ所ト大差ナク、佛國ハ清國ニ一步ヲ讓リタルモノ、如シ。

第三十四章

明清ノ人物畧傳

徐達常遇春、太祖ニ從テ、四方ヲ征略ス。太祖ノ吳王ノ位ニ即クヤ、徐達右相國トナリ、常遇春平章政事トナル。帝大號ヲ正スニ及ンテ、徐達ヲ信國公トシ、常遇春ヲ鄂國公トシ、二人ニ命シテ、兵二十五萬ヲ



率非テ、北伐シ、中原ヲ定メシム。汴梁ヲ取リ、潼關ヲ拔キ、遂ニ山西ヲ定ム。太祖ノ中原ヲ定ムル、二人尤モ力アリ。洪武二年、常遇春軍中ニ卒ス。帝痛悼シテ曰ク、平定ノ功、常遇春十ノ八九ニ居ルト。二子ヲ封シテ公トシ、長女ヲ以テ太子ノ妃トス。既ニシテ徐達、陝西ヲ平ク、帝ノ功臣廟ヲ建ル。徐達、常遇春ヲ以テ首トス。洪武十八年、徐達卒ス。帝追悼シ、親カラテ文ヲ爲リテ之ヲ祭リ、中山王ニ追封シ、長子某ヲシテ、魏公ニ襲封ス。

劉基

劉基ハ青田ノ人、幼ヨリ聰明天文、兵法、性理ノ諸書、目ヲ過クレハ其要ヲ洞識ス。元ノ至元ノ初、進士ニ擧ケラレ、説行ハレズ。紹興ニ安置ス。太祖使ヲ遣リ、聘スルニ及ンテ、金陵ニ趨キ、十八策ヲ陳ス。帝以テ帷幄ニ侍セシム。帝ノ陳友諒ト鏖戦スルヤ、基驚テ曰ク、難星過ク、速ニ舟ヲ更ヘヨト。帝急ニ之ヲ更フ。舊舟已ニ敵砲ノ碎ク所トナル。擊

王守仁

テ友諒ヲ殺ス。後大史令トナリ、律令ヲ定ム。洪武八年卒ス。爵誠意伯トナル。基帝ヲ輔ケ、中原ヲ平定ス。帝嘗テ子房ヲ以テ之ニ譬フ。賜詔ニ曰ク、學ハ帝師タリ、才ハ本王佐。渡江業士無雙、開國文臣第一。王守仁ハ、浙江餘姚ノ人、陽明山人ト號ス。天資英異、平生講學ヲ以テ自カラ任ズ。其學專ラ良知良能ヲ致ス。以テ主トス。武宗ノ朝、劉瑾ノ政ヲ亂スヤ、上疏シテ之ヲ諫ム。瑾詔ヲ矯メ、之ヲ杖ス。髡レテ復蘇ル。貴州ニ謫セラル。瑾之ヲ死ニ置カントス。人ヲシテ途ニ伺ハシム。守仁免カレサルヲ慮リ、夜ル伴テ江ニ投スルマテシテ、冠履ヲ水上ニ浮ヘ、遂ニ武夷山中ニ入ル。寧王宸濠ノ叛、守仁勤王ノ兵ヲ率非、擊テ之ヲ平ラク。後功ヲ以テ新建伯トナル。兵部尚書ニ任ス。已ニシテ又田州ノ亂ヲ平ラク。世宗ノ嘉靖八年卒ス。守仁才文武ヲ兼テ、尤心ヲ經學ニ用非テ、天地萬物一體ノ理ニ悟ル。著ス所傳習錄アリ。



嵩嚴

世宗日ニ齋醮ヲ事トシ、經年朝ヲ見ス、嚴嵩禮部尙書トナリ、罷任セ  
 ラレテ事ヲ用ヰル、賄賂公行、邪佞日ニ親ム、百官建白スル所、皆先ツ  
 嵩ニ白シ、然ル後上聞ス、苞苴其門ニ輻輳ス、曾銑カ塞ヲ出テ虜ヲ破  
 ルヤ、嵩其妄リニ邊釁ヲ開クヲ論シ、之ヲ斬ル、沈鍊、嵩カ私門ヲ營ミ、  
 威福ヲ專ニスルノ十大罪ヲ論ス、詔シテ之ヲ廷杖シテ、保安ニ謫シ、  
 後之ヲ殺ス、揚繼盛、又嵩カ十罪、五奸ヲ論ス、帝怒リ之ヲ廷杖ス、血肉  
 忿起ス、卒ニ之ヲ殺ス、後帝漸ク嵩ヲ疑フ、鄒應龍、嵩父子ノ不法ヲ極  
 論ス、帝心動キ、嵩ニ命シ致仕シ、傳ニ乘シ去ラシメ、其子世蕃ヲ獄ニ  
 下ス、後チ誅ニ伏ス、嵩故舊ニ寄食シ、以テ死ス、  
 李自成、米脂ノ人、性狡黠善ク走リ、騎射ヲ能クス、崇禎元年延安盜  
 起ルニ及シテ、往テ之ニ投ス、官軍來リ討ス、自成走テ山澤ニ匿ル、已  
 ニシテ復々出ツ、旬日ノ間、衆萬餘ニ至ル、衆、高迎祥ヲ推テ首トシ、關

李自成

吳三桂

王ト稱シ、自成ヲ闖將トス、高迎祥獲ラレテ、磔死スルニ及ンテ、自成  
 闖王ト爲ル、洛陽ヲ攻メテ之ヲ陷レ、福王常洵ヲ殺シ、又南陽ヲ陷レ、  
 唐王聿錞ヲ殺ス、自成初メ遠圖ナシ、河南荊襄ヲ擧クルニ及ンテ衆  
 百萬アリ、始テ天下ヲ制スルノ志アリ、遂ニ王ヲ西安ニ稱シ、國號ヲ  
 建テ順ト曰フ、進テ京師ヲ陷ル、毅宗自經ス、范景文、倪元璐等節ニ死  
 スル者數十人、自成帝位ニ武英殿ニ即ク、已ニシテ吳三桂ノ誘キ破  
 ル所トナル、走テ黔陽ニ在リ、食ニ乏シ、自カ出テ抄掠ス、村民ノ殺ス  
 所トナル、  
 闖賊ノ近畿ニ迫ルヤ、吳三桂ヲ平西伯ニ封シ、入テ衛テシム、三桂兵  
 ナ率非入テ援ク、京城陥リ、帝后難ニ殉スト聞キ、縞素哀ヲ發シ、援ヲ  
 請ニ乞ヒ、直ニ北京ヲ擣ク、李自成大ニ驚キ、三桂ノ父喪ヲ執ヘ、書ヲ  
 作テ三桂ヲ招ク、三桂伴テ之ニ應シ、直ニ守關ノ賊ヲ殺シ、京師ニ逼



鄭成功

ル自成大ニ怒リ、盡ク、三桂カ家口ヲ殺シ、襄カ首ヲ城上ニ懸ク、三桂  
 悲憤清ニ降り、攻撃尤モ力ム、自成破レ陝西ニ走ル、清三桂カ爵ヲ平  
 西王ニ晋ム、是ヨリ清ノ爲メニ連戦シ、叛亂ヲ平ラケ、明帝由榔ヲ緬  
 甸ニ撃ツ、緬酋帝ヲ執ヘ、三桂ニ送ル、是ニ於テ三桂權勢愈重シ、已ニ  
 シテ又々清ニ叛キ、帝ト稱シ、元ヲ建テ、衡州ニ都ス、康熙十七年死ス、  
 孫世璠嗣ク、清軍滇城ヲ復スルニ及ンテ、世璠自殺ス、  
 鄭成功、初ノ名ハ森、字ハ大木、平國公芝龍ノ子ナリ、芝龍流落シテ日  
 本肥前ニ客タリ、平戸ノ士田川某ノ女ヲ娶リ、天啓四年成功ヲ生ム、  
 生レテ七歳、父ニ從テ歸ル、年十五ニシテ、弟子員ニ補セラル、隆武帝  
 唐見テ之ヲ偉ナリトシ、其背ヲ撫シテ曰ク、恨ムラクハ一女ノ汝ニ  
 配スルナキヲ、姓ヲ朱ト賜ヒ、今ノ名ニ改メ、中軍都督ニ拜セラル、是  
 ヨリ中外國姓爺ト稱ス、既ニシテ芝龍心ヲ清ニ通ス、一日成功帝ノ

愁悶スルヲ見、奏シテ曰ク、陛下鬱々樂マズ、臣カ父ノ故ヲ以テニ非  
 ラスヤ、臣厚恩ヲ受ク、義、父ヲ顧ルニ暇アラス、死ヲ以テ陛下ヲ護ラ  
 ン、清軍福州ニ入ルニ及ンテ、芝龍出テ降ル、清兵安海ニ至リ、淫掠ヲ肆ニ  
 ス、成功カ母亦辱ヲ蒙ル、城樓  
 ニ登テ自殺シ、自カラ河水ニ投ス、成功痛恨其母  
 ノ腹ヲ剖キ、腸ヲ出タシ、澁テ而シテ之ヲ飲ス、成功父叛キ、母死スルニ及ン  
 テ、慷慨悲憤、義兵ヲ起スヲ謀リ、着ル所ノ、儒服ヲ焚キ、去テ漳、泉、潮、惠  
 ノ諸州ヲ取ル、清主高爵ヲ以テ之ヲ招ク、成功報セズ、厦門ヲ以テ根  
 據トシ、軍勢大ニ振フ、忠孝伯ヨリ延平郡王トナル、大舉シテ、金陵ヲ  
 攻ム、成ラス、然レトモ成功カ世ヲ竟ルマテ、清軍厦門ヲ窺ハス、永曆  
 十五年、親カラ兵三千ヲ率、臺灣ニ入り、荷蘭ノ戍兵ヲ追ヒ、之ヲ取  
 ル、臺灣ヲ改メテ安平鎮トシ、又東寧ト改ム、土酋皆約束ヲ受ク、法律  
 ヲ制シ、學校ヲ興ス、吳三桂、永曆帝ヲ害スト聞キ、憤惋シテ疾ヲ成シ  
 卒ス、年三十九、子經、孫克塽相繼テ明ノ正朔ヲ奉シ、東寧ヲ鎮スル數



范文程

十年、成功義兵ヲ起セシヨリ、克瑛清ニ降ルマテ、  
凡テ三十七年清克瑛ヲ封シテ漢軍公トス、

范文程ハ、瀋陽ノ人、宋ノ范仲淹ノ後ナリ、天命三年、策ヲ杖テ、清ノ大  
祖ニ謁ス、流賊李自成カ、明ノ北京ヲ陷レ、吳三桂來テ師ヲ乞フヤ、建  
議シ、大祖ヲ勸メ、之ヲ討セシム、文程亦疾ヲ扶ケ、征ニ隨フ、紀律ヲ申  
嚴シ、秋毫無犯スナシ、進テ賊兵二十萬ヲ破ル、世祖ノ鼎ヲ定ムル、上  
疏シテ盡ク明季ノ弊政ヲ除ク、營テ晝夜闕下ニアリ、事巨細トナク、  
機ニ應シ立トコロニ辨ス、開國ノ規制多クハ、文程ノ定ムル所ナリ、  
議政大臣ニ任セラレ、一等子ニ至リ、小保ニ晋ム、病ヲ以テ休ヲ乞フ、  
詔シテ畫工ヲ遣リ、第ニ就キ、其像ヲ圖シ、內庫ニ藏ス、其卒スルニ及  
ンテ、聖祖親カラ碑文ヲ製シ、墓上ニ勒ス、

鄂爾泰

鄂爾泰姓ハ、西林覺羅氏、滿洲ノ人、雍正三年、雲貴總督ニ署セラル、貴  
州、神苗、險ヲ負ミ、肆逆ナリ、之ヲ鎮撫スル、久フシテ成ラズ、鄂爾泰奏

林則徐

シテ曰ク、百年ノ無事ヲ欲セハ、土ヲ改メ、流ニ歸スルニ非レハ不可  
ナリ、盈廷色ヲ失フ、太宗曰ク、此レ奇臣、天我レニ賜フナリ、三省總督  
ヲ加ヘ、賊ヲ討セシム、賊悉ク擒ニ就ク、帝大ニ悦フ、公人ヲ知リ善ク  
任シ、賞罰明肅、麾下身ヲ顯貴ニ致ス者亦多シ、世宗晩年、公ヲ召シ、禁  
中ニ宿セシメ、月ヲ逾テ出テス、人皆之ヲ怪シム、世宗俄ニ升遐スル  
ニ及ンテ、顧命ヲ受クル者、公一人ノミ、遺詔ヲ奉シ、禁城ニ入ル、深夜  
馬ナシ、驪ニ騎テ奔リ、高宗ヲ擁立ス、禁中ニ宿スル七晝夜、始テ出ツ、  
左袴紅濕、人驚テ之ヲ見レハ、髀血涔々下ル、方ニ知ル、倉卒ノ際、驪ノ  
傷ル所トナルヲ、公竟ニ知ラサルナリ、軍機大臣、大保ヲ以テ卒ス、  
林則徐生レテ敏警、身ノ長ケ六尺ニ盈タズ、英光四射、聲洪鐘ノ如シ、  
河東總督ニ擢テラレ、累遷シテ湖廣總督トナリ、遂ニ粵東ノ命アリ、  
是ニ於テカ、阿片ノ亂アリ、公大ニ爲ス所アテント欲ス、遂ニ思ム者



ノ中傷スル所トナリ、其位ヲ安ンセス、天下是ヨリ多事ナリ、洪秀全ノ亂、公ニ命シ欽差大臣トシ、馳セテ廣西ニ赴キ、督勦セシム、公營テ粵ヲ督シ、威惠並ヒ著バル、粵民手ヲ額ニシテ相慶ス、賊黨散スル大半、洪秀全惧レ、遁レテ海ニ入ルヲ謀ル、公進テ潮州ニ次シ、疾テ薨ス、是ヨリ賊勢大ニ張リ、海内ノ全力ヲ竭シテ、匪ニ之ニ克テ得ル、當時方ニ西洋ヲ以テ愛トナス、或人公ニ就テ方略ヲ請フ、公曰ク、此レ與ミシ易キノミ、終ニ中國ノ患ヲ爲ス者ハ、魯西亞カ、吾レ老タリ、君等當サニ之ヲ見ルヘシ、是ノ時魯西亞支那ニ交通セサル數十年、聞ク者皆之ヲ疑フ、

曾國藩

曾國藩、咸豐元年刑部左侍郎トナル、此時洪秀全所在ヲ陷レ、勢頗ル猖獗、詔シテ國藩ヲシテ之ヲ討勦セシム、是ニ於テ兵ヲ長沙ニ治メ、戚繼光ノ束伍ノ法ニ倣ヒ、僅ニ一縣ノ人ヲ以テ、諸省ニ轉戰シ、遂ニ

湖北ヲ定メ、軍威大ニ振フ、是ヨリ國藩諸將ヲ指揮シ、自カラ全局ヲ總持シ、百戰卒ニ賊ヲ平ク、議者謂フ、粵賊戡定ノ功、國藩之ヲ始ニ倡ヘ、之ヲ終ニ總フ、深遠ノ謀、堅卓ノ力、往古ノ名臣ニ求ムルモ、罕ニ觀ル所ナリ、西洋通商以來、中外情形大ニ變ス、國藩時勢ノ艱ヲ知り、務テ條約ヲ守定シ、示スニ誠信ヲ以テシ、制器、學校、操兵、尤モ意ヲ致ス、同治十一年疾テ薨ス、城中士女、父母ヲ喪スルカ如シ、詔シテ大傅ヲ贈リ、專祠ヲ建ツ、李鴻章カ奏疏ニ云フ、曾國藩ノ人トナリ、事ニ臨テ謹慎動テ繩墨ニ應スル、諸葛亮ニ似タリ、謀ヲ發シ、策ヲ決シ、物ニ應シ、務ヲ度ルハ、陸贄ニ似タリ、默シテ精要ヲ究メ、始終誠一ナルハ、司馬光ニ似タリ、臣曾國藩ニ於テ師トシ、事フル三十年、既ニ聞見スル所アリ、固リ、好ニ阿テ溢美セス、



第三十五章

支那現今ノ制度形勢等

今上帝

今上光緒(Kwangshu)帝ハ我紀元二千五百三十一年ニ生ル、咸豐(Hien-fung)帝ノ弟醇(Shun)親王ノ子ナリ、紀元二千五百三十五年一月二十三日、先帝穆宗崩シテ子ナシ、故ニ入テ位ニ即ク、時ニ歲甫メテ四年ナリ、帝ハ久シク慈禧西太后ノ攝政ヲ受ケタリシカ、二千五百四十七年三月ニ至リテ、親ヲ政務ヲ執ルヲ得タリ、

政朕

政朕ハ所謂君主獨裁ニシテ皇帝ハ無限ノ權ヲ有シ、萬事其欲スル所ヲ行フヲ得ルナリ、我國ニ於ケル如ク、更ニ憲法ノ設ナク、又輿論公議ヲ以テ政府ヲ補導スルモノアルナシ、政府ニ於テ處理スル萬般ノ事務ハ、悉ク皇帝ノ意ニ出ツルモノトス、是ヲ以テ幸ニ皇帝ノ聰明ニシテ、事務ニ通達シタル明君ナレハ、其國民ニ恩澤ヲ施コシ、

政府ノ組織

國事ヲ改良セシムルコト立憲國ノ如ク、國會ノ同意ヲ得スシテ、行フヲ得ルヲ以テ、甚ク容易ナソトモ、之ニ反シテ、暗愚ノ君ナル時ハ、其禍實ニ大ナリ、支那政府ノ組織ニ於テ、有力ナル第一ノ官衙ヲ、内閣(Nai-Ko)トス、大臣大學士數名及參事官アリテ、之ニ屬ス、其人員ノ半ハ滿人、半ハ漢人ヲ用ル、其職掌ハ、勅令閣令ヲ發スルコト、或ハ政務ヲ奏聞シテ、之カ勅裁ヲ受クルコト、又政務ノ分擔ヲ命シ、各主務ノ官衙ニ之ヲ執行セシムルコト、又内閣ニハ、政務上必要ナル、數箇ノ印璽ヲ保管セリ、内閣ニ次テ有力ナルハ、參議院ニシテ、政府中特種ノ威權アルモノトス、其議員ハ、數名ノ親王、大學士、六部ノ尙書、長官及侍郎(次官)ヨリ組織セルモノニシテ、其職務ハ、勅令及勅裁ノ案ヲ作りテ之ヲ書シ、皇帝ヲ輔佐シテ、萬般ノ政務ヲ規正スルニアリ、又皇帝モ時々此



院ニ親臨シテ政務ヲ聽ク、此院ハ諸官衙ノ是非ヲ監視ス、  
 内閣及參議院ノ外ニ、六部ノ官衙アリ、即チ第一戸部、第二禮部、第三  
 吏部、第四兵部、第五刑部、第六工部是ナリ、此各部ニハ尙書二人、左右  
 侍郎六人、郎中八人、其他檢査官書記等ノ諸員アリ、而シテ郎中以上  
 ハ支那本部ノ人ト、滿州ノ人ト、相半ハスルヲ例トス、又外國ニ關ス  
 ル事務ヲ處理スル爲ニ設ケタル、總理衙門ト稱スル一官衙アリ、其  
 長ハ親王ニシテ其下ニ六人ノ大臣アリ、  
 其他小部局ニハ都察院、理藩院、大理寺、大常寺、翰林院、鴻臚寺、光祿寺、  
 國子監、欽天監等アリ、都察院ノ如キハ四五十人ノ議員アリテ、議長  
 二人アリ、此院ノ議員ハ、昔時ヨリノ慣習ニヨリテ、何事ニテモ忌憚  
 ナク、皇帝ニ諫奏スルコトヲ得ルナリ、以上ノ諸官衙ハ總テ北京ニ  
 アリ、

地方ノ制度

全國ヲ分テ十八省トシ、十八省ノ名前更ニ盛京、吉林、臺灣等ノ諸省アリ、十八省又左ノ如クニ分ツ、

北部地方	直隸	山東	山西	河南	東部地方	江蘇	安徽	江西
府	一一	一〇	九	九	九	八	八	三
鎮	三	〇	三	〇	〇	三	〇	二
州	二二三	一一	一六	一〇	六	九	二	二
縣	一一四	九六	八五	九七	六二	五〇	七五	七二
面積英方里	五八、九四九	六五、一〇四	五五、二六八	六五、一〇四	九二、九六一	九二、九六一	七二、一七六	七二、一七六
首都	奉天	濟南	太原	開封	江寧	安慶	南昌	南昌







之ヲ中央政府ニ送致スルナリ、又各省ニ於テ、臨時財政ノ困難アル時ハ、人民ヨリ金圓ヲ借リ、一時ヲ辨シ、租税ノ收入アルニ從テ、之ヲ償却スト云フ、其會計法ノ備ハテサル斯ノ如シ、

官階品級

- 正一品 太師、太傅、太保、大學士、
- 從一品 少師、少傅、少保、太子太師、全太傅太保、各部院尚書、都察院左右都御史、
- 正二品 太子少師、全少傅少保、總督、左右侍郎、從二品 內閣學士、翰林院掌院學士、巡撫、布政使、
- 正三品 左右副都御史、通政使、詹事、案察使、
- 從三品 光祿寺卿、鹽運使、太僕寺卿、
- 正四品 通政司副使、少詹事、順天府丞、奉天府丞、各省主巡道、

- 從四品 國子監祭酒、內閣侍讀學士、侍讀學士、侍講學士、知府、
- 正五品 左右春坊庶子、給事中、郎中、治中、同知、各直隸知州、各府同知、通政使參議、理事官、
- 從五品 翰林侍讀學侍講、監察御史、員外郎、知州、
- 正六品 內閣侍讀、司業、通判、經歷、五官正、
- 從六品 翰林院修撰、僧錄司副敎、道錄司、
- 正七品 翰林院編修、筆貼式、主簿、知縣、
- 從七品 檢討、中書、主簿、博士、經歷、
- 正八品 翰林院五經博士、朝鮮通事、各部院筆貼式、
- 從八品 翰林院典簿、布政使照磨、僧錄司覺義、
- 正九品 五官司書、各府知事、茶馬大使、
- 從九品 翰林院待詔、五官司農、僧錄都綱、府陰陽



武衛官階品級

- 正一品 領侍衛內大臣
- 從一品 內大臣八旗滿州 蒙古漢軍都統、外省駐防將軍
- 正二品 統領、總兵、副都統
- 從二品 散秩大臣、副將
- 正三品 一等侍衛、參領、總管、王府長史、參將
- 從三品 一等護衛、遊擊、參領
- 正四品 二等侍衛、佐領、協尉、聖廟百戶
- 從四品 城門領、察哈爾副參領、太僕寺馬廠駝廠總管
- 正五品 三等侍衛、步軍副尉、步軍校、防禦
- 從五品 守禦所千總、四等侍衛
- 正六品 藍翎侍衛、營千總

歲入

- 從六品 衛千總、內務府六品翎長
  - 正七品 城門吏、弓匠固山達、把總、七品廕監生
  - 從七品 盛京遊牧副尉
  - 正八品 八品廕監生、外委千總
  - 從八品 委署親軍校、副護軍校
  - 正九品 外委把總
  - 從九品 太僕寺委署固山達、額外外委
- 支那ノ歲入ハ左表ノ如シ此表ハ千八百八十八年刊行ノステ  
ツマシ、イイヤナツクニ據ル
- | 税目 | 金高                          |
|----|-----------------------------|
| 地租 | 二〇、〇〇〇、〇〇〇 <small>兩</small> |
| 米  | 二、八〇〇、〇〇〇                   |
| 銀  | 九六〇〇、〇〇〇                    |
| 鹽稅 |                             |



海關稅

一五、〇〇〇、〇〇〇、

過關稅及他ノ諸稅

一九、〇〇〇、〇〇〇、

合計

六六、四〇〇、〇〇〇、

凡ソ我カ八千九百六十四萬圓

此ノ正稅ノ外ニ臨時必要ノ場合ニ於テハ、官位ヲ賣ルコト、及富察ノ者ニ御用金ヲ課スルコトノ二法アリテ、大ナル財源ナリシカ、官位ヲ賣ルノ一法ハ、十年以前ニアツテ、既ニ廢セラレタリ、然レハ爵位ヲ賣ルコトハ、今尙ホ盛ニ行ハル、此ノ表ノ外ニ、尙ホ幾多ノ歲入アルハ、疑フ可ラサル事實ナリ、

歲出

支那政府ノ經費ハ、精密ニ之ヲ知ルニ由ナシト雖モ、左ニミツドルキンクトム中ニ掲クル表ヲ示サン、

經費ノ要目

文武官ノ俸給

七、七三三、五〇〇、<sub>兩</sub>

歩兵六十萬人一人一ヶ月三兩ノ割

二、一六〇、〇〇〇、

騎兵二十四萬二千人一ヶ月四兩ノ割

一、一六六、〇〇〇、

騎兵馬匹一頭ニ付二十兩

四、八四〇、〇〇〇、

被服料一人四兩

三、三六八、〇〇〇、

小銃及軍需

八四二、〇〇〇、

海軍及其他

一三、五〇〇、〇〇〇、

運河及運輸

四、〇〇〇、〇〇〇、

城寨砲兵軍費等

三、八〇〇、〇〇〇、

總計

七一、三三九、五〇〇、

此計算表ハ、數年以前ノ者ニ屬スト雖モ、大ニ信憑スヘキ者ニシテ、之ニ國債ノ利子ヲ加フレハ、凡ソ歲出ノ額ヲ知ルヘシ、且此ノ表ニ



外國債

於テ、歲出費目ノ割合ヲ知ルニ便ナレハ、暫ク此ニ掲ク、  
 政府ハ近年マテ、外國債ヲ募集スルコトヲ好マサリシカ、光緒帝ノ  
 即位ノ後、初メテ六十萬磅餘ノ外債ヲ募集シテ、之ニ八厘ノ利ヲ附  
 シ、海關稅ノ收入ヲ以テ、其償却ニ當ツルコト、爲セシヨリ、後屢、外  
 債ヲ募リテ、現時ハ五百萬磅ノ額ニ達セリ、而シテ其債權者ハ、多ク  
 英國人ナリ、  
 儒教、佛敎、道教ノ三教ハ共ニ支那人ノ尊信スル所ナレハ、獨リ儒教  
 ハ國教ノ如キ姿ナリ、然レハ儒教ニ於テハ、唯ニ祖先ヲ崇拜スルコ  
 トノミ、宗教ノ觀アレハ、其他ノ儀式ニ至テハ、宗教トシテ見ルヘキ  
 モノニ非ス、又支那ノ道義ハ、皆孔子ノ教義ニ基ツキテ、之ヲ標準ト  
 ス、  
 支那本部ノ人民ハ、多ク前ニ示シタル三教ヲ信スレハ、支那ノ東北

宗教

人口

及西南部ノ人民中、回教ヲ信スルノ徒アリテ、其數凡三百萬人アリ  
 ト云フ、此他羅馬教ヲ信スルモノ凡ソ一百萬人、プロテスタントノ  
 信者凡ソ五萬人アリト云フ、  
 支那現今ノ人口ハ、未ダ精密ナル計算ヲ遂ケタルモノナシ、故ニ各  
 國政府ノ最モ必要トセル完全ノ戶籍ハ、支那帝國ニ絶テアルコト  
 ナシ、是ヲ以テ支那ハ只人口ヲ臆算シテ、課稅ノ表準ヲ立ツルノミ、  
 西曆千八百十二年<sup>嘉慶帝ノ時</sup>ノ統計ハ、最モ精確ナル人口ノ數ヲ示ス  
 モノナリト云フ、之ニ由ル時ハ、支那本部十八省ニテ人口三億六千  
 二百四十四萬七千八百八十三アリテ、一平方英里ニ凡二百人ノ割合  
 ナリ、又千八百八十一年、支那帝國稅關ノ報告ニハ、三億八千萬ナリ  
 トセリ、  
 清ノ學制ハ、明ノ制ニ因テ、稍之ヲ増損ス、京師ニ國子監ヲ設ケ、又府

教育



州縣各學校ノ設アリ、教授、教諭、訓導等アリテ、之ヲ教フ、小兒七歳ニシテ學ニ入り、應對進退ノ法ヲ學ヒ、十歳ノ頃ヨリ私塾ニ入りテ晝夜書數ノ業ヲ受ケル者アリ、十三歳ニ至リテ、音學及詩ヲ學ヒ、又弓馬槍劍ノ術ヲ磨ク、二十歳ニシテ正丁トナリ、社會ノ實業ニ就ク者アリ、又増、學術ヲ脩メテ進士及第ヲ望ム者アリ、初メ小兒ノ學ニ入ルヤ、孝經ノ類ヲ素讀誦スルニ止リ、我カ國小學校ノ如キ完全ナルモノニ非ス、理化學、數學ノ類ハ絶テ之ヲ數ソルコトナシ、又普通教育ノ方法等ハ、唯慣習ニ從テ行フノミニシテ、一定ノ制度アルニ非ス、而シテ小學教師ノ過半ハ、文學ニ因テ官吏タラントノ望ヲ以テ勉學シタル候補者ノ失敗シタル者ニシテ、他ノ業務ヲ執ル能ハサル者ナリ、

文學上ノ階級ニ四アリ、第一ヲ秀才(Sin-shi)ニ似タル者ニシテ、此學位ヲ得ルニハ、知縣ノ試験ヲ受ケサル可ラス、試験ハ學政(Hsueh-ching)及教諭(Kiaoyu)ニテ之ヲ掌ル、試験ハ問題ニ就テ、終日ニ答案ヲ作ラシメ、優秀ヲ判シ及落ヲ定ム、受験者凡ソ四千人ニシテ、僅カニ三十人位ノ及第者アリ、

第二ヲ舉人(Mo-shi)ハ、第一ノ秀才ニ於テ行ハレ、教授之ヲ掌ル、此試験ハ三ケ年ニ一度之ヲ行フ、金力ノ學力ニ優ル者ハ、此學位ヲ受ク、二百弗乃至千弗ノ相場ニテ官ヨリ之ヲ賣ルナリ、前年ノ如キハ政府ノ財ヲ要スルコトアリテ、二十五弗ニテ賣リタルコトアリ、而シテ此試験ハ陰曆八月九日、其衣服、帽、靴、等總テ嚴密ニ之ヲ改メ、試験場ニ入ル時ニ行フモノトス、其人員廣東省ノ如キハ六千人位ナレトモ、大省ニテハ七八千人以上アリト云フ、

第三ヲ進士(Mo-shi)ハ、此試験ハ北京ニ於テ行ハレ、各人各別室ニ入ラレテ、第二ハ紙ト墨筆、其他食用ニ供スル物ノミ、北京ノ試験場ニハ一萬ノ室アレ、尙ホ不足ヲ感スルコトアリト云フ、其室ハ一方口ニシテ、僅カニ一人ヲ容ル、ハニ足ルノミ、此ノ如キ室ニ閉綱セラレ、林實ノ健康ナラサルモノハ死ニ至ルアリ、此試験ニハ年齡ニ限リナキヲ以テ、六十以上或ハ八十ノ老人モアリト云フ、平均ハ三十以上ナリ、試験ハ四書五經及歴史上ノ問題ニ就キ、答案ヲ作ラシメ、月ノ第一日ヨリ九日間、此ノ狹隘ナル一室ニ閉居セシム、十一日日出ノ時再ヒ此ニ集ル、此時前九日ノ答案不合格ノ者ハ入ルコトヲ許サレズ、十三日ニ至テ皆又室ヲ出ツ、翌朝更ニ合格者ヲ撰テ、法律、歴史、地理等ノ問題ニ就キテ試ミ、十六日ニ至テ皆又室ヲ出ツ、翌朝更ニ合格者ヲ撰シ、二十五日間ニ全ク之ヲ終ル、若シ受験者ヲ五千トスル時ハ、各人十三ノ答案ヲ作ルカ故ニ、六万五千ノ答紙ヲ得ルナリ、此内ヨリ七八十人ヲ撰フナリ、及第者ハ三萬兩ナリト云フ、此試験モ三年ニ一度ニシテ、又十年ニ特別ニ一度アリ、或ハ戰勝、即位、帝ノ婚儀等ノアリシ時ニ之ヲ行フ、進士ヨリ官途ニ即クヲ得ルナリ、

第四ヲ翰林(Han-lin)ト云フ、翰林ハ學位ヨリ、寧ロ官位ト稱スヘキモノニシテ、每三年ニ之ヲ行ヒ、之ニ及第シタル者ハ翰林



海陸軍

學士トナリテ、給料ヲ受クルモノトナルナリ、

八旗ノ總兵員ハ、三十二萬三千八百人ニシテ、其中十萬人ハ、毎年一回北京ニ於テ皇帝ノ觀兵スル所ナリト云フ、又禁裡ノ衛兵ハ七百十七人アリ、

國民軍ハ、六千四百五十九ノ士官ト、六十五萬ノ兵卒トヨリ成ル、支那ノ兵制ニ就キテハ、確實ナルコトヲ知ルニ難シト雖モ、現今ハ盛ニ泰西ノ兵式ニ因テ、其兵ヲ訓練シ、兵艦、銃器、皆泰西ノ新式ニ法トリ、大ニ進歩ヲ致セリ、

海軍ノ進歩モ亦著シク、海軍衙門ヲ設ケテ、諸艦隊ノ事ヲ掌ル、首府北京ヲ護衛スル、北洋艦隊最モ強勁ニシテ、英國海軍士官ノ指揮訓練ヲ受ク、

西曆千八百八十五年、獨乙ニ於テ新造セル、定遠鎮遠 (Ting yuen Chien

土地及人口

Yuen)ノ姊妹艦ノ如キハ、頗ル堅牢ナルモノニシテ、排水噸七千三百三十五、六千馬力、十四ノット半ノ速力ヲ有ス、之ニ屬スル一切ノ武器皆備ハル、其他二千噸以上ノ巡洋艦數艘アリ、又北支那艦隊ニ屬スル數多ノ船艦アリ、水雷艦モ亦近年ニ至リテ採用スルニ至レリ、

地名

英方里

人口

支那本部

一、二九七、九九九

三八三、〇〇〇、〇〇〇

滿州

三六二、三二〇

一一、〇〇〇、〇〇〇

モンゴリヤ

一、二八八、〇〇〇

二、〇〇〇、〇〇〇

チベット

六五一、五〇〇

六、〇〇〇、〇〇〇

東トルキスタン

四三二、八〇〇

五八〇、〇〇〇

合計

四、〇三二、六〇九

四〇三、五八〇、〇〇〇

外國人

西曆千八百八十六年ニ、外國人ノ支那ニ居留スル者總數七千六百



貿易

國名	輸	入	輸	出	全	貿	易	額
	九十五人アリ、其内							
	英國人			三、四三八、				
	日本人			七七七、				
	米國人			七四一、				
	獨乙人			六二九、				
	佛國人			四七一、				
	西班牙人			三一九、				
	其他ノ國人			一、三三〇、				
	以上ノ外國人ハ、各開港場ニ住居スルモノナレドモ、其大半ハ上海ニ居住スルモノナリ、							
	支那ノ諸外國ニ於ケル貿易ニ關シテ、左ニ輸出、輸入ノ表ヲ掲ク、							

英國	二二、〇三四、七五三、	一九、七四五、六九四、	四一、七八〇、四四七、
香港	三四八八九、六七一、	二二、五五二、六七六、	五七、四四二、三四七、
印度	一六、九八〇、〇三五、	五三一、六〇一、	一七、五一一、六三六、
米國	四六四七、三三三、	九六八五、六九一、	一四、三三三、〇二四、
歐洲諸國	二、七四九、〇八三、	一一、九二八、四〇四、	一四、六七七、四八七、
日本國	五、六九一、四八九、	一、三二二、〇三六、	六、九一三、五二五、
魯國	二〇二、九一八、	七、〇三九、三三二、	七、二四二、二五〇、
合計	八七、一九五、二八二、	七二、七〇五、四三四、	一五九、九〇〇、七一六、

貿易品中、其重要ナル者ハ、輸入品ニ、阿片、綿布、絹、毛織物、金屬、石炭ノ類ニシテ、阿片ニ二千五百萬兩、綿布ニ、三千萬兩ヲ消費ス、又輸出品ニハ、茶、絹、砂糖、藻組織、毛革、紙等ニシテ、其多額ヲ占ムルモノハ、茶ニ三千萬兩、絹ニ二千萬兩ナリ、列國中、最モ多ク支那ト貿易スル國ハ、



英國ニシテ、毎年貿易全額ノ三分ノ一ヲ占ムルト云フ、現時外國ト貿易スル爲ニ開ク處ノ港市、二十二アリ、就中上海ハ、西曆千八百五十四年ニ開ク所ノ交易場ニシテ通商最モ盛ナリトス、支那ノ外國貿易ハ、帝國稅關局ノ處理スル所ニシテ、英國人其長タリ、千八百五十五年、支那ノ開港場へ出入シタル船舶ノ數、及其噸數左ノ如シ、

船舶 二萬三千四百四十艘 此噸數千八百六萬八千七百七十七噸

内 (汽船 一萬八千六百九十一、 此噸數千七百一萬二千九百三十噸  
帆船 四千七百四十九、 此噸數、百五萬五千二百四十七噸)

船舶ノ出入最モ多キハ英國ニシテ、

船數 一萬三千五百二十二、噸數千八百八十四萬二千二百五十五

其ノ他ハ左表ノ如シ、

支那本國ノ船 四千三百四十五、噸、二百二十四萬三千五百三十四、

交通

獨乙國ノ船 二千二百三十、噸、 百二十一萬七千六百八十五、

日本國ノ船 二百八十六、噸、 二十一萬五千五百八十五、

米國ノ船 二千五百二十四、噸、 二百二十六萬千七百五十五、

佛國ノ船 四十六、噸、 七萬三千三百五十五、

支那内地ノ交通ハ、陸路、川河溝渠等ニ據ルト雖モ、道路ノ修繕甚タ惡シクシテ、交通不便ヲ極ム、支那ノ内地ハ、鉄道ノ布設ニ適シ、殊ニ人口夥多ナル場所ニ於テハ、最モ容易ニ架設スルヲ得レトシ、支那政府ハ、未タ文明ノ利器ヲ使用スルニ銳意熱心ナラス、人民モ亦西洋ノ文明ヲ嫌惡スルノ傾向アリテ、鉄道ノ如キモ、先年マテハ、僅カニ開平炭坑ヨリ、運河ニ達スル、七英里ノ鉄道アリシノミナルガ、現今ハ次第ニ延長スルノ傾アリ、

按スルニ支那ニ於テ、最初ニ鉄道ヲ布設シタルハ、英國人ニシテ



上海ト吳松トノ間凡ソ四十英里ヲ聯絡シタリシカ、支那政府ハ之ヲ高價ニ買ヒ上ケテ、軌條ヲ壞テ、諸機械ヲ庫中ニ收メタリ、支那政府ノ處置固ヨリ笑フヘシト雖モ、人民ノ愚亦憐レムニ堪ヘタリ、

鐵道ハ右ノ如キ有様ニシテ布設シタルモノ少シト雖モ、電線ノ架設ハ甚タ多ク、西曆千八百八十四年ニ里數三千〇八十九英里ノ長サニ達シ、此ノ線ノ延長五千四百八十二英里アリ、近年ニ至リテ、雲南、寧波、福州、朝鮮ニモ架設セリ、其進歩驚クヘシ、

度量及通貨ノ割合

重量

- 兩「リヤン」又ハ「テール」ハ 英ノ一「オンス」三分ノ一 我カ凡七々五分
- 擔「ピコル」百斤ハ 英ノ百三十三「ポンド」三分ノ一 我カ凡ソ十六貫目
- 斤「キン」又ハ「キヤチー」ハ 英ノ一「ポンド」三分ノ一 我カ凡ソ百六十々

尺度

- 里「リ」ハ 英ノ凡ソ三分ノ一「マイル」 我カ凡ソ四町五十四間
- 丈「チャン」ハ 英ノ十一「フイート」下三分ノ一 我カ曲尺凡ソ同シ
- 尺「チ」ハ 英ノ十四「インチ」下十分ノ一 我カ曲尺凡ソ同シ

通貨

- 兩「テール」ハ 英ノ凡ソ五「シリング」三分ノ一 我カ凡ソ金貨一圓
- 錢「メース」 十錢ヲ一兩トス、
- 厘「キヤンダリン」 十厘ヲ一錢トス、
- 毛「キヤン」 十毛ヲ一厘トス、

支那文明史略卷之六終



○ 自 引 註

北 京 試 驗 場 之 圖

此 圖 示 北 京 試 驗 場 之 概 況

其 中 之 各 部 分 均 有 詳 盡 之 說 明

茲 將 各 部 分 之 名 稱 列 於 左 下

一 試 驗 場 之 總 門 二 試 驗 場 之 中 門

三 試 驗 場 之 大 門 四 試 驗 場 之 正 門

五 試 驗 場 之 東 門 六 試 驗 場 之 西 門

七 試 驗 場 之 南 門 八 試 驗 場 之 北 門

九 試 驗 場 之 東 圍 牆 十 試 驗 場 之 西 圍 牆

十一 試 驗 場 之 南 圍 牆 十二 試 驗 場 之 北 圍 牆

北 京 試 驗 場 之 圖

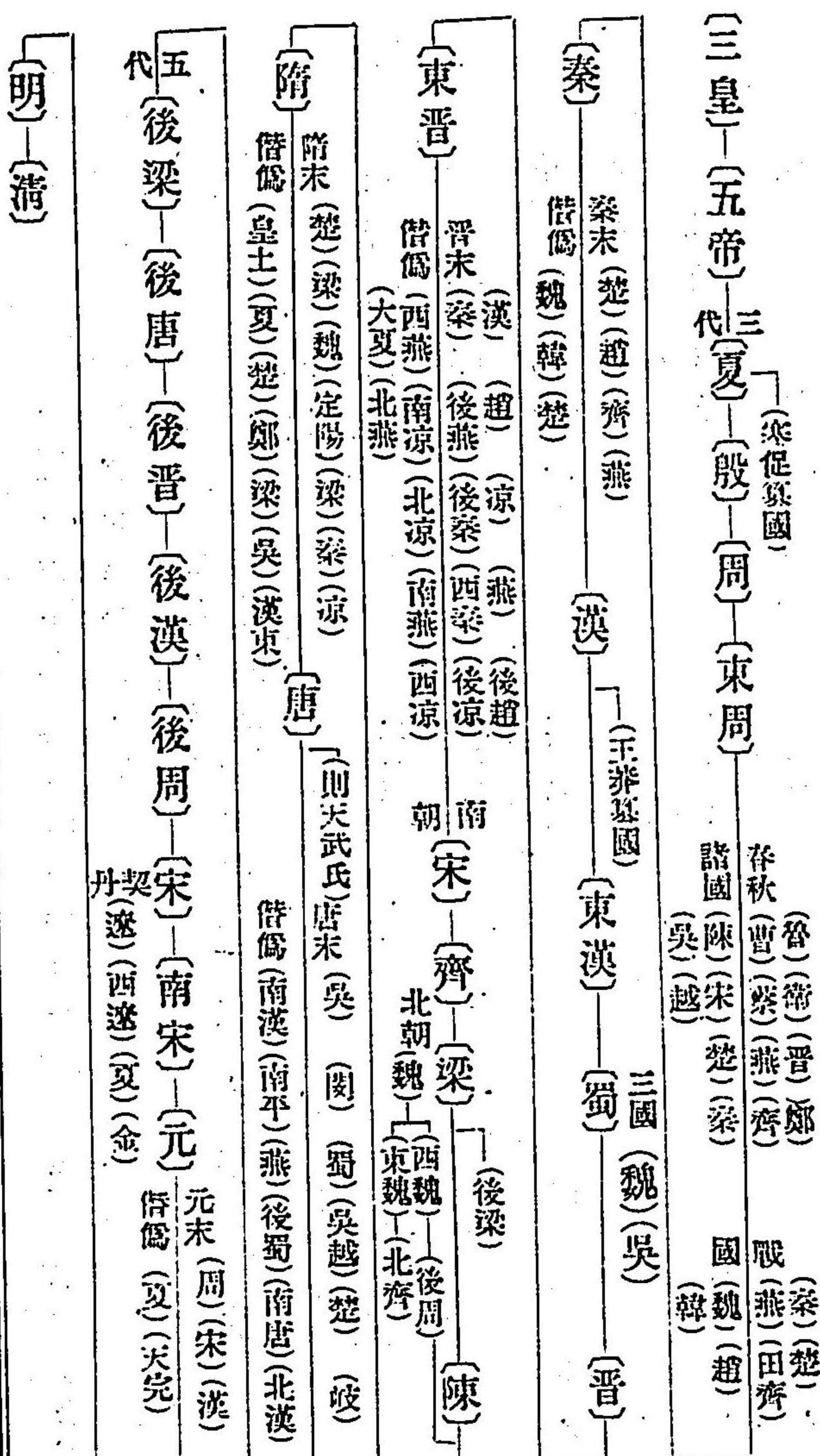




支那文明史略附錄

漢土帝王歷代國號系圖

附諸國 (一) 正統 (二) 僭偽



○附錄



以下帝王年代ノ表ハ中外年表ニ據ル本文ト異同  
アレヒ今改メス

太昊伏羲氏	二九五三	一五	承統
炎帝神農氏	二八三八	一四〇	
黃帝有熊氏	二六九八	一〇〇	
少昊金天氏	二五九八	八四	黃帝ノ子
顓頊高陽氏	二五一四	七八	黃帝ノ孫
帝嚳高辛氏	二四三六	七〇	少昊ノ孫
帝	二三六六	九	帝嚳ノ子
帝堯陶唐氏	二三五七	一〇二	帝嚳ノ子
帝舜有虞氏	二三五五	五〇	帝嚳ノ子
即位ノ年西 曆紀元前		在位ノ年	

大禹	二三〇五	八	禹ノ子
帝啓	二二九七	九	禹ノ子
太康	二二八八	二九	啓ノ子
仲康	二二五九	二三	太康ノ弟
帝相	二二四六	二八	仲康ノ子
少康	二二一八	六一	帝相ノ子
帝杼	二〇五七	一七	少康ノ子
帝槐	二〇四〇	二六	帝杼ノ子
帝芒	二〇一四	一八	帝槐ノ子
帝泄	一九九六	一六	帝芒ノ子
帝不降	一九八〇	五九	帝泄ノ子
夏		七四八	



雍	太	仲	外	河	祖	祖	沃	祖	南	陽	盤
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
巳	戊	丁	壬	甲	乙	幸	甲	丁	庚	甲	庚
一六四九	一六三七	一五六二	一五四九	一五三四	一五二五	一五〇六	一四九〇	一四六五	一四三三	一四〇八	一四〇一
二二	七五	一三	一五	九	一九	一六	二五	三二	二五	七	二八
小甲ノ弟	雍巳ノ弟	太戊ノ子	仲丁ノ弟	外壬ノ弟	河亶甲ノ子	祖乙ノ子	祖辛ノ弟	祖辛ノ子	沃甲ノ子	祖丁ノ子	陽甲ノ弟

商

帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
局	厘	甲	臯	發	癸	湯	甲	丁	康	甲	小
一九二一	一九〇〇	一八七九	一八四八	一八三七	一八一八	一七六六	一七五三	一七二〇	一六九一	一六六六	一六六六
二二	三二	三二	二二	一九	五二	四三九	一三	三三	二九	二五	一七
帝不降ノ弟	帝局ノ子	帝不降ノ子	帝孔甲ノ子	帝臯ノ子	帝廢ノ子	成湯ノ孫	太甲ノ子	沃丁ノ弟	太康ノ子	太康ノ子	太康ノ子



周											
幽	宣	厲	夷	孝	懿	共	穆	昭	康	成	武
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王
七八一	八二七	八七八	八九四	九〇九	九三四	九四六	一〇〇一	一〇五二	一〇七八	一一一五	一一三三
二	四六	五一	一六	一五	二五	二	五五	五一	二六	三七	七
宣	厲	夷	懿	共	共	穆	昭	康	成	武	文
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
子	子	子	子	弟	子	子	子	子	子	子	子

紂										
紂	帝	太	武	庚	廩	祖	祖	武	小	小
辛	乙	丁	乙	丁	辛	甲	庚	丁	乙	辛
二一五四	二一九一	二一九四	二一九八	二二一九	二二三五	二二五八	二二六五	二三二四	二三五二	一三七三
六四四	三三	三七	三	四	二	六	三三	七	五九	二八
帝	太	武	庚	廩	祖	祖	武	小	小	盤
乙	丁	乙	丁	辛	甲	庚	丁	乙	辛	庚
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
子	子	子	子	弟	子	弟	子	子	弟	弟



敬	元	貞	考	威	安	烈	顯	慎	報	東	
	定			烈				靚		周	
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	君	三十五
五二九	四七五	四六八	四四〇	四二五	四〇一	三七五	三六八	三三〇	三一四	二五五	
四四	七	二八	一五	二四	二六	七	四八	六	五九	七	八七四
景王ノ子	敬王ノ子	元王ノ子	貞定王ノ子	考王ノ子	威烈王ノ子	安王ノ子	烈王ノ弟	顯王ノ子	慎靚王ノ子		

平	桓	莊	僖	惠	襄	頃	匡	定	簡	靈	景
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王
七七〇	七二九	六九六	六八一	六七六	六五二	六一八	六一二	六〇六	五八五	五七一	五四四
五一	三三	一五	五	二五	三三	六	六	二	一四	二七	二五
幽王ノ子	平王ノ孫	桓王ノ子	莊王ノ子	僖王ノ子	惠王ノ子	襄王ノ子	頃王ノ子	匡王ノ子	定王ノ子	簡王ノ子	靈王ノ子



東漢										
成	哀	平	孺	僞	淮	光	明	章	和	殤
帝	帝	帝	子	新王	陽王	武	帝	帝	帝	帝
三	一	五	六	三	三	二	二	三	一	一
元帝ノ子	成帝ノ子	元帝ノ孫	宣帝ノ玄孫			景帝ノ裔	光武帝ノ子	明帝ノ子	章帝ノ子	和帝ノ子

漢										
始	二	高	惠	呂	文	景	武	昭	宣	元
皇	世	帝	帝	后	帝	帝	帝	帝	帝	帝
三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三三	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一
始皇帝ノ子	高帝ノ子	惠帝ノ母	惠帝ノ養子	文帝ノ子	景帝ノ子	武帝ノ子	武帝ノ曾孫	宣帝ノ子		



晉		吳							
惠	武	末	景	廢	大	宋	少	廢	明
帝	帝	四帝	帝	帝	帝	五帝	帝	帝	帝
二九〇	二八〇	二六二	二五六	二五一	二三〇	二七四	二六八	二五四	二四一
一七	一〇	六〇	一八	六	五	三一	四六	六	六
武帝ノ子			景帝ノ子						文帝ノ子

魏	蜀漢	三國								
文	後	昭	獻	靈	桓	質	冲	順	安	
帝	二帝	烈帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
二三四	二三九	三三七	一九〇	一六八	一四七	一四六	一四五	一三六	一〇七	
二七	四三	四二	二	一九五	三〇	三三	二二	一	一九	一九
		昭烈帝ノ子			靈帝ノ子	章帝ノ玄孫	章帝ノ曾孫	章帝ノ曾孫	順帝ノ子	安帝ノ子
										章帝ノ孫



齊											宋
高祖	順帝	廢帝	明帝	廢帝	孝武帝	文帝	廢帝	武帝	恭帝		
四七九	四七七	四七三	四六六	四六五	四五四	四四四	四三三	四二〇	四一九	十五	帝
四	五九	二	四	七	一	二	三〇	一	三	一四〇	一
蕭道成	明帝ノ子	明帝ノ子	文帝ノ子	孝武帝ノ子	文帝ノ子	武帝ノ子	武帝ノ子	劉裕	安帝ノ弟		

											懷愍
安帝	孝武帝	簡文帝	帝	哀帝	穆帝	康帝	成帝	明帝	元帝	愍帝	懷帝
三九三	三七三	三七一	三六六	三六二	三四五	三四三	三三六	三三三	三二七	三一三	三〇七
三三	二四	二	五	四	一七	二	一七	三	六	四	六
孝武帝ノ子	簡文帝ノ子	元帝ノ子	哀帝ノ弟	成帝ノ子	康帝ノ子	成帝ノ弟	明帝ノ子	元帝ノ子	武帝ノ孫	惠帝ノ弟	



唐										隋													
中	高	太	高		恭	煬	文		後	宣	臨												
											海												
宗	宗	宗	祖	三	帝	帝	帝	五	主	帝	王												
六八四	六五〇	六二七	六二〇		六一八	六〇五	五八九		五八三	五六九	五六七												
二	三	三	七	三	二	一	一	三	六	一	二												
高宗ノ子	太宗ノ子	高祖ノ子	李淵		煬帝ノ孫	文帝ノ子	楊堅		宣帝ノ子	文帝ノ弟	文帝ノ子												

陳										梁													
文	武		敬	元	簡	武		和	東	明	武												
							文			昏													
帝	帝	四	帝	帝	帝	帝	五	帝	侯	帝	帝												
五六〇	五五七		五五五	五五二	五五〇	五〇二		五〇一	四九九	四九四	四八三												
七	三	五	五	二	三	二	四	三	一	二	五	二											
武帝ノ甥	陳霸先		元帝ノ第九子	武帝ノ第七子	武帝ノ第三子	蕭衍		明帝ノ子	明帝ノ子	高祖ノ兄	高祖ノ子												



文	敬	穆	憲	順	德	代	肅	玄	睿	中	武
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	后
八二七	八二五	八二一	八〇五	八〇五	七八〇	七六三	七五六	七一三	七一〇	七〇五	六八四
一四	二	四	五 五ヶ月	一五	七ヶ月	二五	一七	七	四三	三	二〇 十ヶ月
穆宗ノ二子	穆宗ノ長子	憲宗ノ子	順宗ノ子	德宗ノ子	代宗ノ子	肅宗ノ子	玄宗ノ子	睿宗ノ子	中宗ノ弟	重祚	中宗ノ母

後唐	五代後梁										
明	莊	末	太	昭	昭	僖	懿	宣	武		
宗	宗	二帝	祖	宣	帝	宗	宗	宗	宗	宗	
九二六	九三三	九一三	九〇七	九〇五	八八九	八七四	八六〇	八四七	八四一		
八	三	一六	一〇	六	二八七	二	一六	一五	一四	一三	六
存勗		太祖ノ第三子	朱全忠		昭宗ノ九子	僖宗ノ七子	懿宗ノ子	宣宗ノ子	憲宗ノ十三子	穆宗ノ五子	



南宋										北宋
高宗	欽宗	徽宗	哲宗	神宗	英宗	仁宗	真宗	太宗	太祖	趙匡胤
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	祖	三
一一二七	一一二六	一一〇一	一〇八六	一〇六八	一〇六四	一〇三三	九九八	九七六	九六〇	
十一ヶ月	一	二五	一五	一八	四	四一	二五	二二	十一ヶ月	一ヶ月
徽宗ノ子	徽宗ノ子	神宗ノ子	神宗ノ子	英宗ノ子	仁宗ノ子	真宗ノ子	太宗ノ子	太祖ノ弟	太祖ノ弟	趙匡胤

恭帝	世宗	太祖	高祖	高祖	高祖	高祖	高祖	高祖	高祖	高祖
帝	宗	祖	三	帝	祖	二	王	祖	四	王
九六〇	九五四	九五二	九四九	九四七	九四六	九三六	九三四	九三四	九三四	九三四
一ヶ月	一六	三	四	二	二	二	四	七	一三	八ヶ月
世宗ノ四子	太祖ノ養子	郭威	高祖ノ子	劉知遠	高祖ノ姪	石敬瑭	高祖ノ姪	明宗ノ養子	明宗ノ子	明宗ノ子



明										
宣	仁	成	惠	太	順	文	明	泰	英	仁
								定		
宗	宗	祖	帝	祖	九	帝	宗	宗	帝	宗
一四二六	一四二五	一四〇三	一三九九	一三六八	一三三三	一三三〇	一三二九	一三二四	一三二一	一三二二
一〇	一	三	四	三	八	三	一	五	三	九
仁宗ノ子	成祖ノ子	太祖ノ四子	太祖ノ孫	朱元璋		明宗ノ子	武宗ノ第二子	武宗ノ第一子	仁宗ノ子	成宗ノ弟

元

元										
武	成	世	帝	端	恭	度	理	寧	光	孝
宗	宗	祖	九	景	宗	宗	宗	宗	宗	宗
一三〇八	一二九五	一二七九		一二七八	一二七六	一二七五	一二六五	一二三五	一二九五	一一九〇
四	三	六		一	二	一	〇	四	三	五
成宗ノ姪	世祖ノ孫	忽必烈		度宗ノ末子	度宗ノ長子	度宗ノ二子	理宗ノ子	高宗ノ裔	光宗ノ子	孝宗ノ子
										高宗ノ子



英	景	憲	孝	武	世	穆	神	光	熹	莊
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	帝
十六										
烈										
一四三六	一四五〇	一四六五	一四八八	一五〇六	一五二二	一五六七	一五七三	一六二〇	一六二二	一六二八
一四	一五	二三	一八	一六	四五	六	四七	一	七	一六
宣宗ノ四子	宣宗ノ二子	英宗ノ子	憲宗ノ子	孝宗ノ子	武宗ノ子	世宗ノ子	穆宗ノ子	神宗ノ子	光宗ノ子	熹宗ノ弟

二十四

世	聖	世	高	仁	宣	文	穆	今
祖	祖	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗
治順	熙康	正雅	隆乾	慶嘉	光道	豐成	治同	緒光
一六四四	一六六二	一七三三	一七三六	一七九六	一八二二	一八五一	一八六二	一八七五
一八	六一	一三	六〇	二五	三〇	二一	一三	
太祖ノ子孫	世祖ノ子	聖祖ノ子	世宗ノ子	高宗ノ子	仁宗ノ子	宣宗ノ子	文宗ノ子	宣宗ノ孫

清

○附錄

二十五



文那文明史略跋  
詳君經臣緯代之興亡制度之變遷刑  
制之沿革與祖統共制人情風俗者古  
今史學之要而己矣而今世初學政  
之方注則與古異其撰焉古則務博  
涉今則務簡約古則用漢文今則用  
體文古則文辭高古精鍊故兼講敘  
之法今則雅俗混清故唯取解了之易



百物之史學也而可致之之方法古今  
之殊異如是者何也蓋歐朱之交通實  
為我邦百揆變換之大機治政史學之  
方法亦隨而變換也然則方今之編史  
者何可不斟酌時勢得甘要乎青山若  
心失所編支那文明史略起於太古迄  
清先緒凡四百餘年之君經臣緯代之  
興亡制度之變遷刑制之沿革占租稅

兵制人情風俗今可換折其衷加以已  
之論斷文雅近體字雅而不俗簡而不  
煩故令人炳々煥々如指諸掌其裨益  
豈止初學而已哉可謂能斟酌時勢得  
其要者矣夫世道變換之機治則編史  
者所用心故及跋語之索不辭而特書  
我邦今日政史學方法之所以異古乃  
其所以為我邦百揆變換大機治所致



使世之初學知此書之裨益且使後之  
編史者有所攷焉  
明治廿二年九月中浣備後五十川左  
武郎識於大坂堂島之儒居

南海堂主人書



明治廿五年四月廿三日印刷  
同 廿五年四月廿六日訂正第二版出版

\*\*\*  
改定價金壹圓  
\*\*\*

著者 青山正夫  
岩手縣盛岡市内九十一番地

發行者 松村九兵衛  
大阪市南區心齋橋筋壹丁目六十七番屋敷

印刷者 辻田榮助  
大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷  
大阪活版製造所印刷部









江州彦根	伊勢津	同	同	紀州和歌山	淡州洲本	同	阿州徳島	美濃岐阜	同	讃州高松	同	同	伊豫松山	土州高知	沖繩縣那覇	同	薩州鹿兒島
廣田七治	河島九右衛門	三宅小次郎	津田源兵衛	平井文助	福浦文藏	黒崎精二	坂井万吉	三浦源助	箸方儀三郎	宮脇仲治	石崎本平	土肥與平	向井藏治	澤本駒吉	三笑堂書店	山元正治	吉田幸兵衛
陸前仙臺	羽前鶴ヶ岡	山梨縣甲府	同	上州前橋	同	信州長野	武州鴻巣	同	雲州松江	同	越中富山	越前福井	加州金澤	駿州静岡	同	尾州名古屋	江州大津
伊勢安右衛門	地主文藏	柳正支店	同	煥乎堂	水乎堂	西澤喜太郎	長島爲一	圓山喜三右衛門	川岡清助	中田書店	大橋甚吾	平澤潤助	近田太平	廣瀬市藏	川瀬代助	片野東四郎	島林專二

●師範學校中學校教科用書  
橋本光秋 小田清雄 河先生編

國文讀本

全部四冊 定價金壹圓

本書は、師範學校中學校の教科用書として編纂された。その内容は、國文の基礎を固め、読解力と表現力を養ふことに主眼を置いた。各冊は、時代別、ジャンル別の選文を収録し、系統的に学習を進めさせる工夫がなされている。また、各所に註釈や練習問題が添付されており、自学自習にも適した構成となっている。

水彩畫帖

第一編十二枚既刊 定價金廿八錢

水彩畫は、筆と水と色を自由に操り、自然な光と影を生かして表現する芸術である。本書は、水彩畫の基礎から応用までを体系的に解説し、豊富な図解と練習例を収録している。初心者から上級者まで、幅広い層に受け入れられるように編纂されている。また、各所に作家の解説や創作のヒントが添付されており、読者の創作意欲を刺激する工夫がなされている。



陸州鹿兒島	吉田幸兵衛	江州大津	島林專二
同	山元正治	尾州名古屋	片野東四郎
沖繩縣那覇	三笑堂書店	同	川瀨代助
土州高知	澤本駒吉	駿州靜岡	廣瀨市
伊豫松山	向井藏治郎	加州金澤	近田太平
同	土肥與平	越前福井	平澤潤助
同	石崎本平	越中富山	大橋甚吾
同	宮脇仲治	同	中田書店
同	讚州高松	同	川岡清助
同	同琴平	雲州松江	園山喜三右衛門
美濃岐阜	三浦源助	同	長島爲一郎
同	阿州徳島	武州鴻巣	西澤喜太郎
同	淡州洲本	信州長野	水手琴堂
同	紀州和歌山	同	同
同	同	上州前橋	同
同	同	同	同
同	同	山梨縣甲府	同
同	同	羽前鶴岡	同
伊勢津	同	陸前仙臺	同
江州彦根	同	同	同

●師範學校中學校教科用書  
橋本光秋 小田清雄 両先生編

中等教育 國文讀本

全部四冊 定價金壹圓

本書の教授に經驗あり博識の名ある両先生の編纂に係り専高等小學科を卒業したらん程の子女にして始めて國文と修めんとする者の爲にし文章の難易より第一冊より次冊に漸次簡より繁に易より難に遂に第四冊に至りて中等教育を卒ふべき程度に編せられたるものにして尋常師範學校中學校高等小學校等の國語科讀本に適當の良書なり

東京五性田芳柳先生校閱  
埼玉縣尋常師範學校助教諭增田松之先生著

水彩畫帖

第一編十一枚既刊 定價金廿八錢

方今吾國ニ於テ美術ヲ攷究シ繪畫ヲ研磨スルノ士續々輩出シ諸種ノ圖畫ヲ修メ頻々印行シ後進ヲ益スルモノ少ナカラスト雖水彩畫ニ至テハ臨本ニ乏シク偶々歐米水彩畫帖ノ坊間ニ行ハレアルモ率チ皆高妙ニ過キテ到底初學者ノ能ク摸倣シ得ベキ所ニ非ス増田先生夙ニ茲ニ感アリ即チ本書ヲ著ハシ有名ナル五性田先生ノ校閱ヲ經テ初學者チシテ容易ニ水彩畫ヲ修ムルノ楷梯ヲ得セシム學校生徒ハ勿論苟クモ繪畫ニ志スノ諸氏ハ坐右欠シベカラザル好書ナリ



馬場健先生編輯

本朝名家文範

漢文 全三冊 定價 金六十錢

久留間璵三先生編輯

標註土佐日記

全一冊 定價 金二十錢

村田海石先生書

楷書樂志論

全一帖 定價 金二十錢

藤澤南岳先生漢譯 村田海石先生書

行書聖勅帖

全一帖 賣價 金二十錢

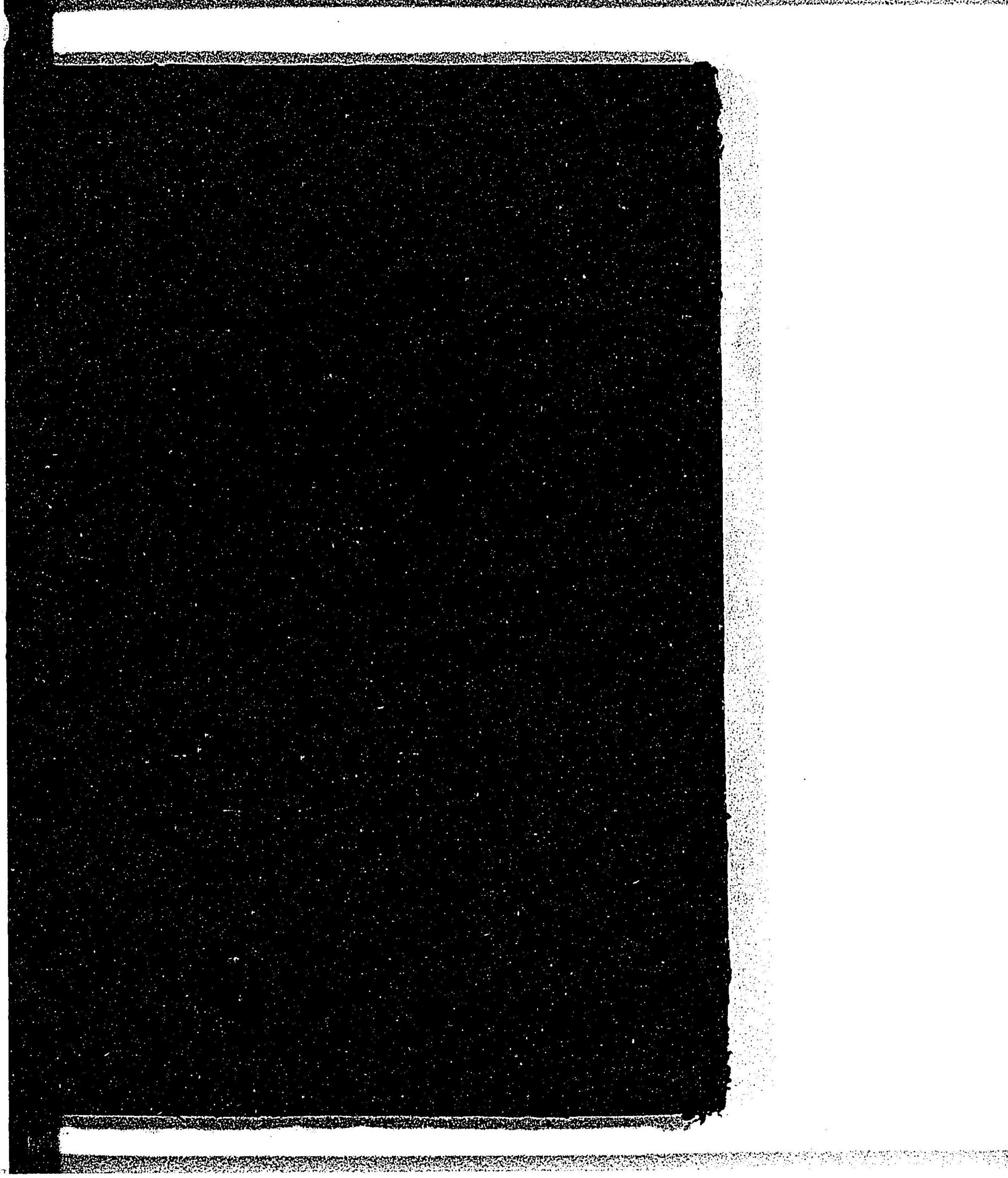
前記ノ圖書ハ兼テ教育家諸君ノ好評ヲ得タル物ナレバ敢テ茲ニ發セズ莫クハ續々教科書ニ採用アランコナ



38

242







003110-000-1

38-242

支那文明史略 (訂正)

青山 正夫/著

M25

ACC-1139





